

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年

熊 木 俊 朗

要旨 礼文島香深井 A 遺跡出土土器群は、北海道北部のオホーツク土器編年を構築する際に最も重要となる資料である。かつて大井晴男は、この香深井 A 遺跡の調査成果に基づいて土器の「型式論的変遷」のあり方について論じ、その結論として、土器型式は「年代学上の単位」にはならないとして山内清男や伊東信雄による土器型式編年の方法を否定した。本論では、大井の「型式論」が抱える具体的な問題点を明らかにするために、香深井 A 遺跡出土土器群に対して属性分析の手法を用いた分析を試みた。その結果、この土器群の型式変化は大井の見解とは異なり、単線的かつ不可逆的なあり方を示すことが明らかになった。この結果を踏まえて本論では、北海道北部のオホーツク土器編年として以下のような 5 型式（8 段階）からなる型式編年を提示した。すなわち、刺突文群＝十和田式（前半・後半）→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群（前半・後半）→道東部の貼付文期に併行する土器群（前半・後半）という編年である。本論の検討結果に従うならば、少なくとも北海道北部のオホーツク土器に関しては、その型式変化の実態は大井が示した「型式論的変遷」とは異なっていたと評価できる。

1. 本論の目的

北海道北部のオホーツク土器型式編年を構築する際に最も重要となる資料は、礼文島香深井 A 遺跡¹⁾（大場・大井編 1976, 1981）の出土土器群であろう。この土器群は、出土量が道北部のなかで随一であるとともに、土器群を包含していた複数の土層が「きわめて明らかな層位的関係をもって堆積」（大井 1982：（上）23）していたと報告されている。型式編年の資料操作や分析に適した条件を有しているという意味で、まさに避けては通れない資料である。

この香深井 A 遺跡出土土器群に対しては、すでに大井晴男が「型式論的変遷」に関する考察を行っている（大井 1982）。大井はこの論文の中で後述するような独自の「型式論」を展開して伊東信雄によるサハリンのオホーツク土器編年（伊東 1942）を批判し、さらには伊東編年が立脚していたと考えられる、山内清男による土器型式編年の方法（山内 1932, 1937, 1964）についても「方法論をして有効ではありえない」（大井 1982：（下）33）との評価を下した。

この大井の説（以下、大井「型式論」と略）に対しては、すでに林謙作の反論がある（林 1991）。ただし林の反論は縄文土器研究の事例を根拠としたもので、オホーツク土器そのものの分析に基づいた直接的・具体的な反論ではなかった。また、代案となる編年の提示という形で大井と異なる見解がこれまでにいくつか発表されたが（右代 1991；柳澤 2008 など）、そこでは大井「型式論」に対する言及はほとんどなされておらず、議論はかみ合っていない。大井「型式論」は香深

井 A 遺跡の調査成果と直結しているのであるから、香深井 A 遺跡出土資料を用いて大井とは異なる編年を論じるならば、大井「型式論」に対する批判的検討が必要となるはずである。

このような現状を踏まえ、近年、榊田朋広・福田正宏と筆者は大井「型式論」の抱える方法論的な問題について批判した（榊田・熊木・福田 2007）。この論文に対しては、大井と近い方法論的立場をとる小野裕子・天野哲也が反論を試みているが（小野・天野 2008）、議論が抽象的な内容に終始した感があり、結論は平行線を辿っている²⁾。もっとも、議論がかみ合わなかった責任の一端は、大井「型式論」に対して具体的な資料に基づいた批判を提出しなかった筆者らにもあった。

以上の現状認識と反省点を踏まえ、本論では香深井 A 遺跡出土土器、ならびに大井「型式論」の再検討を中心に据えて、道北部のオホーツク土器編年を具体的な資料に基づいて再構成する³⁾。分析・記述に煩瑣な部分があるが、大井「型式論」への反論を具体的に述べる必要があったので、止むを得ず微に入った議論を展開した。読者のご寛恕をお願いする次第である。

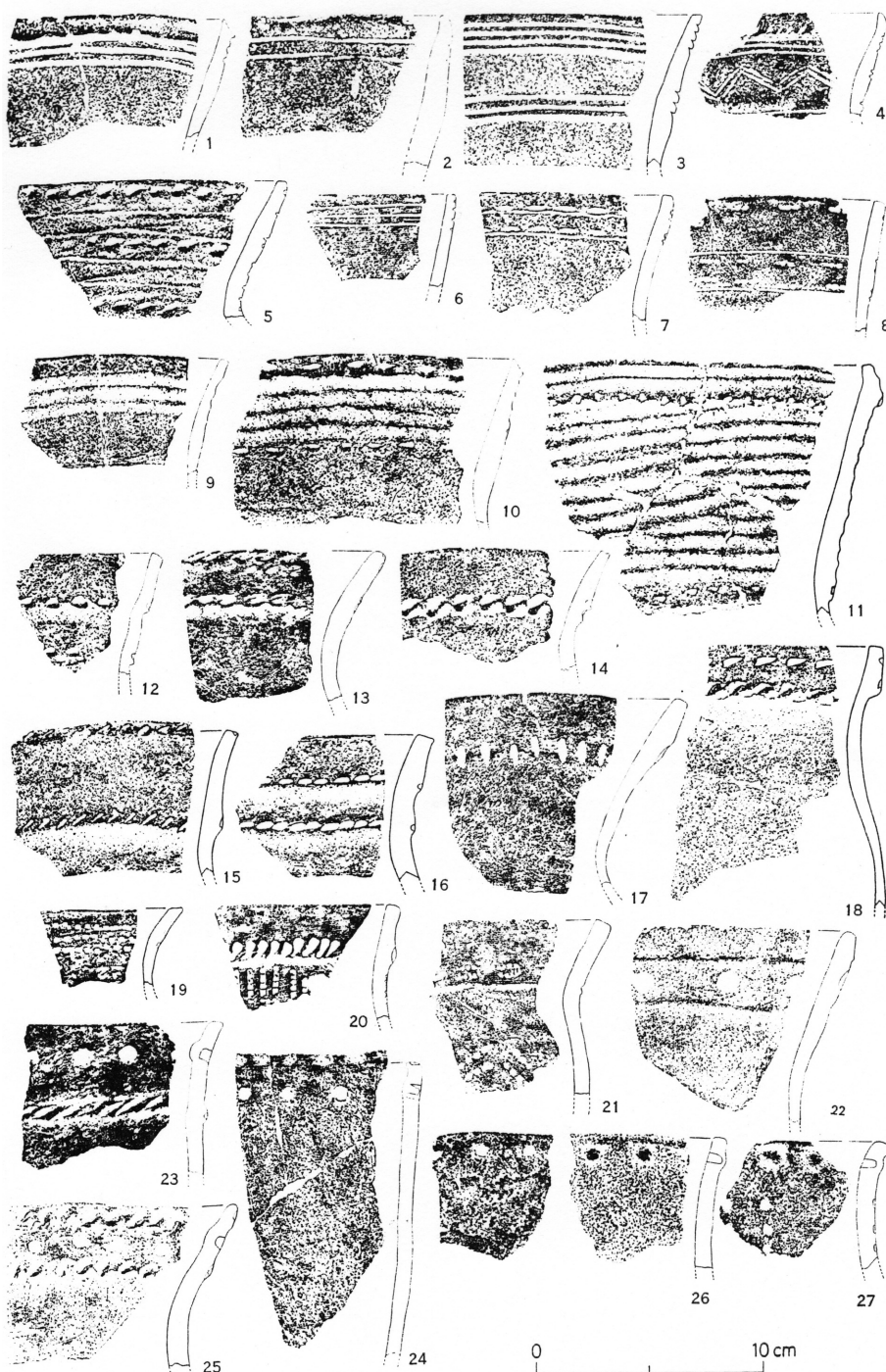
2. 大井の「型式論」について

はじめに、大井による香深井 A 遺跡出土土器群の分析と、大井「型式論」の要点について再確認しておこう。

大井はまず、香深井 A 遺跡で確認された各魚骨層（魚骨層 I ～ VI）について、「相互の間に資料の混淆が起る可能性はほとんどない」（大井 1982 : (上) 23-24）ことを強調した。そしてそのような層位的関係を前提とした上で、同遺跡出土オホーツク土器の「器形」と口縁部の「文様要素」について図 1・図 2（上）のような分類を行い、各魚骨層別に集計した（図 2（下））。この集計結果から導き出された考察と結論は以下のようなものであった。

- a) 香深井 A 遺跡の「器形」と「文様要素」は、それぞれ漸移的に推移し、同一の層位中には複数の型式学的特徴が共伴する。例えば、図 2（下）の魚骨層 III では、沈線文系・刻文系・刺突文系の文様要素が共伴している。
 - b) よって、伊東が行ったように（伊東 1942）、「器形」かつ／または「文様要素」を指標としてオホーツク土器の型式細別を行うならば、複数の型式が香深井 A 遺跡の各魚骨層中で共伴することとなる。伊東は土器型式を「互いに重複しないものとして、縦の関係で編年」（大井 1982 : (上) 37）していたわけであるが、そのような型式編年は香深井 A 遺跡の調査成果とは矛盾する。よって、伊東の方法でオホーツク土器の型式を設定するならば、それらの各型式は「編年的」単位とはならない。
 - c) 香深井 A 遺跡での型式変遷がオホーツク土器一般の変遷と異なっていたと考える理由はないので、以上のような「漸移的な型式論的变化」はオホーツク土器全般の特徴とすることができる。
- 以上の大井「型式論」に対し、筆者は下記の点について議論の余地があると考える。

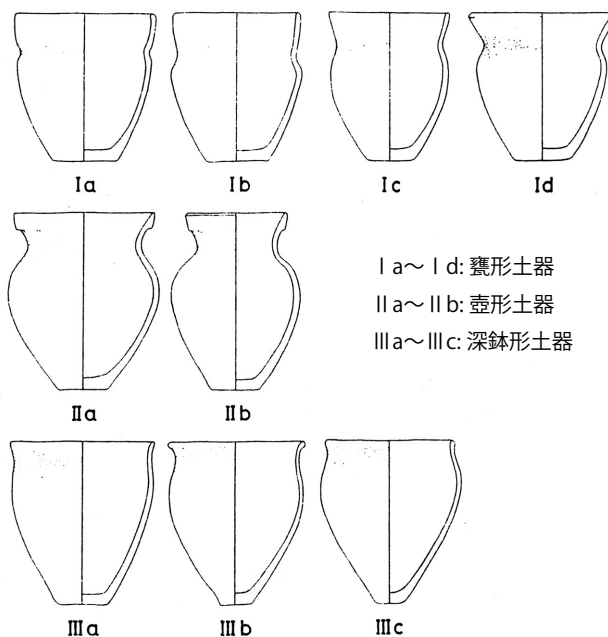
層位と型式のクロスチェック



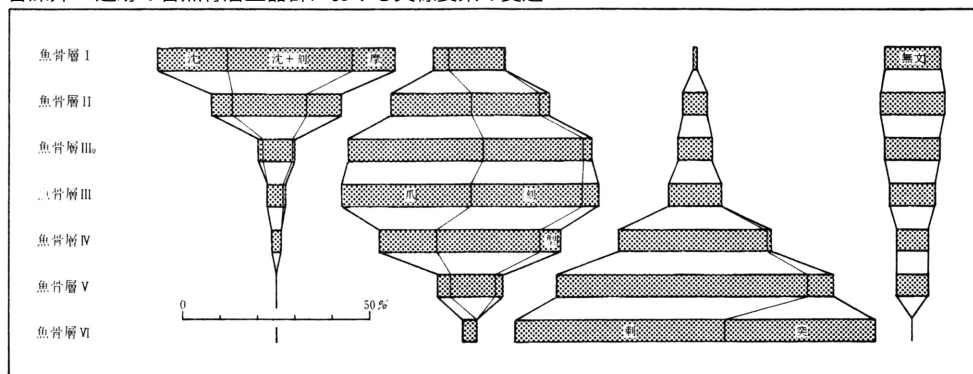
1~4: 沈線文 5~8: 沈線文+刻文等 9~11: 摩擦式浮文 12~14: 爪形文
15~18: 刻文 19~22: 型押文 23~25: 円形刺突文 26・27: 突瘤文

図1 大井による文様要素分類 (大井 1982)

香深井 A 遺跡出土土器の
器形による分類



香深井 A 遺跡の各魚骨層土器群における文様要素の変遷



香深井 A 遺跡の各魚骨層土器群における器形の変遷

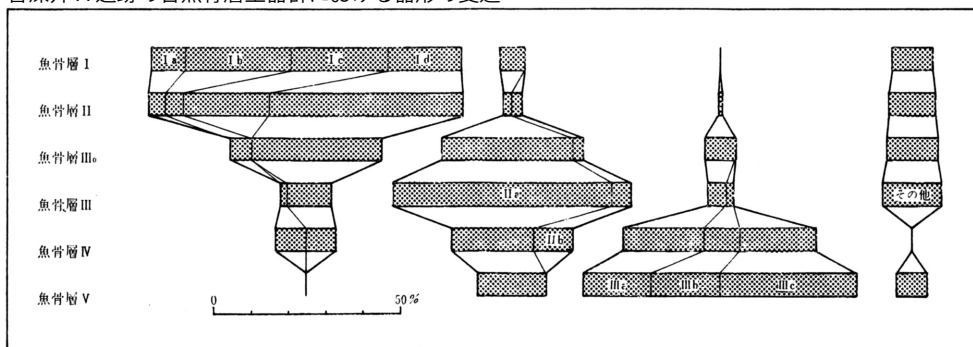


図 2 大井による器形分類（上）と香深井 A 遺跡の各魚骨層における属性の変遷（下）（大井 1982）

大井「型式論」は、香深井 A 遺跡の層位間で混淆がないことを前提として成立している。しかし、そもそも層位と型式は「相互に他を前提とする意味での循環関係にある」（大塚 2000 : 56）わけであるから、「層位は型式に優先する」という前提を無条件に採用することはできないはずである。

もっとも大井は、香深井 A 遺跡の「型式論的変遷」が順調であること、すなわち図 2（下）のセリエーショングラフが順調に推移している点も層位に混淆がないことの傍証となる、とも述べている。その論理からすると型式学的見地からも層位の検証が一応は行われており、一方的に層位を優先させているわけではないというべきかもしれない。それでは香深井 A 遺跡で認められるとされる、「複数の細別型式の共伴」（3 型式以上の共伴）は他の遺跡でも確認できるのであろうか。筆者はむしろ、1 型式単純の、あるいは 2 型式のみから構成されている遺跡など、細別型式間の「区切り」で遺跡が断絶する例を示すことによって、大井の説に疑問を投げかけてみたい。

型式変化の実態について

大井は土器型式のあり方について、「一定の型式論的特徴をそなえた一群の土器がそのままの形である期間存続するわけではない」としている（大井 1982 : (上) 37）。しかし実は、大井「型式論」で分析されているのは様々な型式学的特徴を備えた、言うなれば「属性の束」としての「土器そのもの」ではない。そこでは各属性群が「文様要素」と「器形」というわずか二つの指標に還元・単純化され、しかもそれら二つの指標が各々独立した形で分析されているだけである（林 1991）。

確かに、口縁部文様要素を型式細別の指標とした大井の判断は大筋では正しい。しかし我々が土器型式を認知・弁別する際には、一つないし二つの指標のみを基準とする場合は少なく、時期差を敏感に反映するいくつかの属性を構造的に把握して型式のすがたをイメージし、判断している場合が多いのではないだろうか（林 1990）。このように「複数の属性の組み合わせ」に着目してオホーツク土器を分析した場合、後述のように刺突文系の土器と刻文系の土器の関係は相対的に排他的であるが、刻文系と沈線文系の土器の関係は相対的に漸移的であるなどという評価が可能となり、型式間関係は一樣ではなくなる。すなわち、型式設定の基準や方法如何では、香深井 A 遺跡における土器型式変化の実態は、大井の言うような「全く一連の漸移的な推移」ではないことになる。このように本論では、大井「型式論」とは逆に型式変化の実態が「単調ではない」ことを明らかにする。「単調ではない」とは、型式変化は「一定の型式論的特徴をそなえた一群の土器がそのままの形である期間存続する」という説明に近くなる時期もあるし、また逆に「複数の型式論的特徴が（中略）重複しながら漸移的に推移してゆく」（大井 1982 : (上) 37）というあり方に近くなる時期もある、という意味である。

話が少々複雑になったので単純化して整理し、何を検証するのかについて見通しを示しておこう。

大井「型式論」では、A、B、C という三つの型式は時間的に併存しつつ、A : B : C の割合が変化する、というかたちで変遷することになっている⁴⁾。それに対し筆者は、この A、B、C 型式の変化は A → B、次に B → B'、さらに B' → C という順で起こることを示す。そして少なくとも A と C については型式学的な関連性が薄く、さらに A と C は層位的にも共伴する可能性が低いことをいくつ

かの遺跡例から論証する。A、B、Cの三者が併存する時期がないのであれば、大井の言うような「型式論的変遷」は成立し難いことになる。さらに筆者はAとBの「類似する度合い」と、BとCの「類似する度合い」とが異なることを示し、AからCに至る型式変化の過程は「全く一連の漸移的な推移」だったのではなく、型式変化そのもの、さらには型式変化を生じさせた背景がAからCに至る期間内で一様ではなかった可能性を示唆する。以上が本論の趣旨である。

本論の構成であるが、まず先に香深井A遺跡出土土器に対して型式学的な再検討を行い、大井とは異なった型式細別を設定する。次に香深井A遺跡以前／以後の諸型式を補完して道北部の土器型式編年全体を再構成する。さらに香深井A以外の遺跡での出土状況と香深井A遺跡の「層位的関係」とを対比して両者の矛盾を指摘し、香深井A遺跡の「層位的関係」には再検討の余地が残されていることを指摘する。以上の順序で道北部のオホーツク土器編年を再検討してゆく。

3. 香深井 A 遺跡出土土器の型式学的再検討

(1) 分類対象となる属性と分類項目

ここでは香深井A遺跡出土土器⁵⁾の型式学的特徴を新たに分類し直して再検討する。

まずは時間軸に沿って変化する属性を抽出する。そのような属性として挙げられるのは、やはり「器形」と口縁部「文様要素」であり、これらの特徴に含まれる諸属性が型式細別の指標として有効であることは疑いない。問題は、それらの諸属性のなかから時期差を敏感に反映しているものをうまく抽出し得るか否か、そして抽出した属性を時系列に沿った組列へと誤りなく配列できるか否かであろう。

ここではまず「器形」「文様要素」をより詳細な属性に分解し、各属性について大井とはやや異なる分類を試みる。なお各属性中の分類項目の配列順は、基本的に古手の特徴から新手指の特徴へ、という順序に並べてあるが、この配列順については後ほど検証する。

口縁部文様要素 (図3・表1)

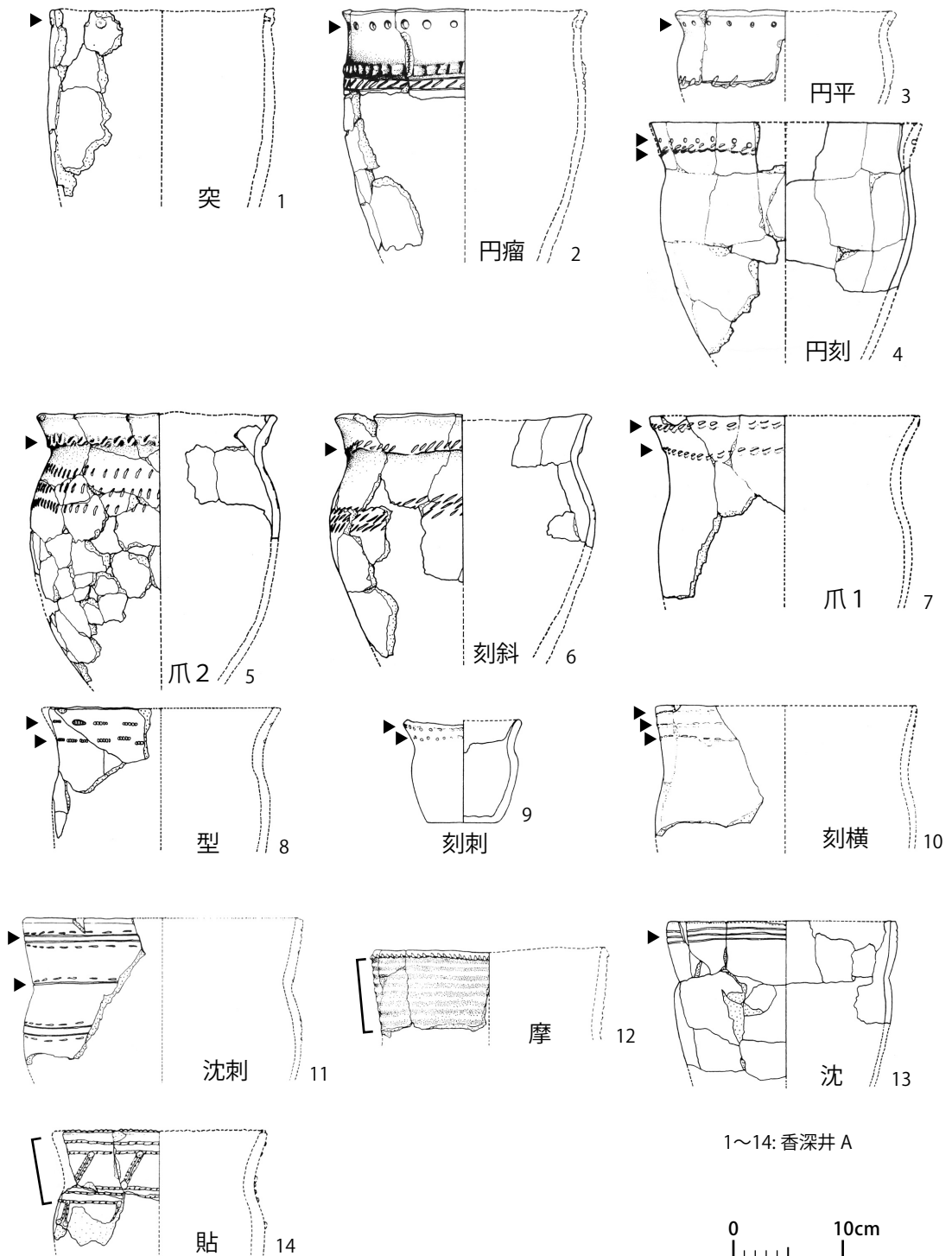
大井の分類を基本としてさらに細別を行い、図3および表1のように15の項目を設定する。複数の文様要素が併存する場合は、より珍しい方の(少数例の)項目へ分類する。

なお大井の分析結果によれば、15の無文は各時期を通じて一定程度見られることが判明しているので、図3・表1の1から14まで(「突」～「貼」まで)を時間軸に沿った旧→新の配列として仮設する。

口縁部施文位置 (図4)

口縁部のどの位置に施文されているか、という属性である。大井分類でもこの属性は意識されているが、文様要素との相関が強いためか、氏の分類では「文様要素」に含めて記述されている。ここでは文様要素から独立させ、図4のように分類項目を設定する。この属性を分類基準に採用する主な意図は刻文系の土器を細別することにある。

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年



1~14: 香深井 A

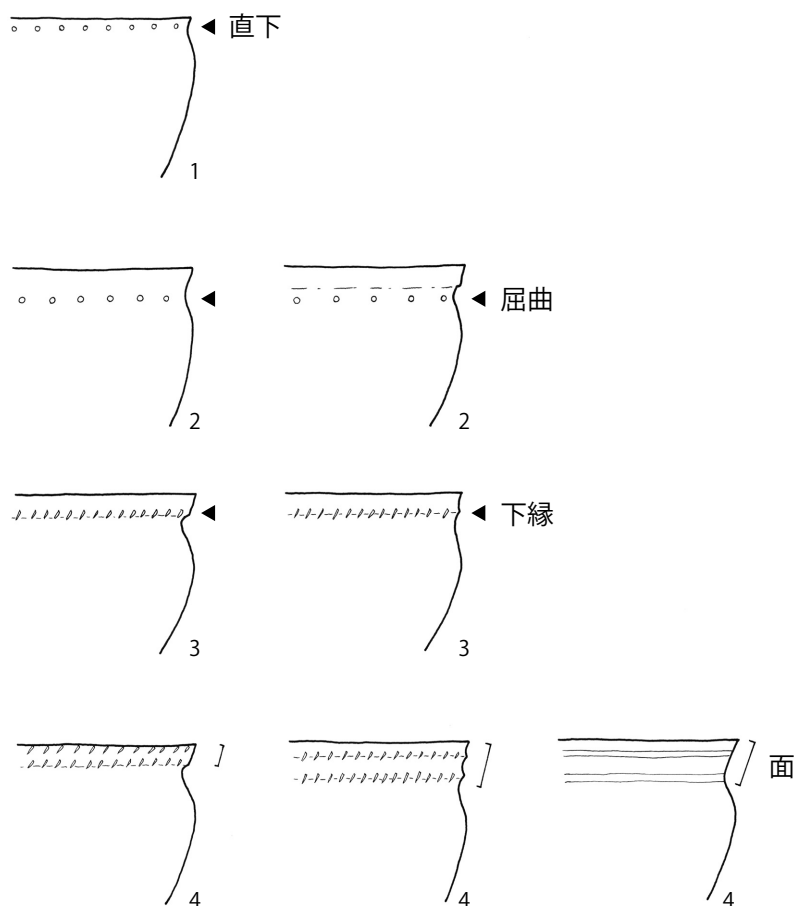
図3 口縁部文様要素の分類

大分類	番号	略号	名称	説明	大井氏分類との対応
刺突文系文様	1	突	突瘤文	器面の内面から断面円形の施文具を刺突し、外面に瘤を作る	「突瘤文」と同じ
	2	円瘤	円形刺突文 (内面瘤あり)	断面円形で棒状ないし竹管状の施文具を器面外面から刺突し、内面に瘤を作る	「円形刺突文」の一部
	3	円平	円形刺突文 (内面瘤なし)	2と同じ施文具・施文法を用いているが、内面に瘤を作らない	「円形刺突文」の一部
	4	円刻	円形刺突文と 刻文系文様の併存	1～3の刺突文系文様と、刻文系文様が併存するもの	「円形刺突文」の一部
刻文系文様	5	爪2	2本の指による 爪形文	親指と人差し指など、相対する二本の指の爪を用いて施す。つまんでひねるものと、ほとんどひねらないものがある	「爪形文」の一部
	6	刻斜	縦～斜め方向の 刻文	棒状の施文具の先端を器面上で縦～斜め方向に動かして刻みつける	「刻文」の一部
	7	爪1	1本の指による 爪形文	一本の指の爪で刻みつける	「爪形文」の一部
	8	型	型押文	先端が櫛歯状に分かれた施文具をスタンプのように押捺する。なお「型」と他の種類の刻文系文様が併存する例はここに分類する	「型押文」の一部
	9	刻刺	刺突文	1～3以外の施文具で刺突する。器面上で施文具を動かさない点で6・10と異なる	「刻文」・「型押文」の一部
	10	刻横	横方向の刻文	棒状の施文具の先端を器面上で水平に動かして刻みつける。なお「刻横」と他の種類の刻文系文様が併存する例はここに分類する	「刻文」の一部
沈線文系文様	11	沈刻	沈線文と刻文系 文様の併存	刻文系文様と、13の沈線文が併存するもの	「沈線と爪形文・刻文・型押文が複合施文される場合」と同じ
	12	摩	摩擦式浮文	太い棒状の施文具あるいは指などで器面をなでつけてできる凹面の線を隣接させ、複数の凹凸線を作出する。刻文が併存する例も含む	「摩擦式浮文」と同じ
	13	沈	沈線文	12を除く、様々な太さの沈線文。口唇部外縁に刻みを併存する例を含む	「沈線文」と同じ
その他の文様	14	貼	貼付文	道東部のオホーツク土器に多く見られる、細い粘土紐を貼り付けた文様	「貼付式浮文」※と同じ
	15	無	無文	胴部にいずれかの文様があっても、口縁部が無文のものはここに含める。多くの例は胴部を含めて全くの無文	「無文」

※大井1982では省略されている。大場・大井編1981では記載がある。

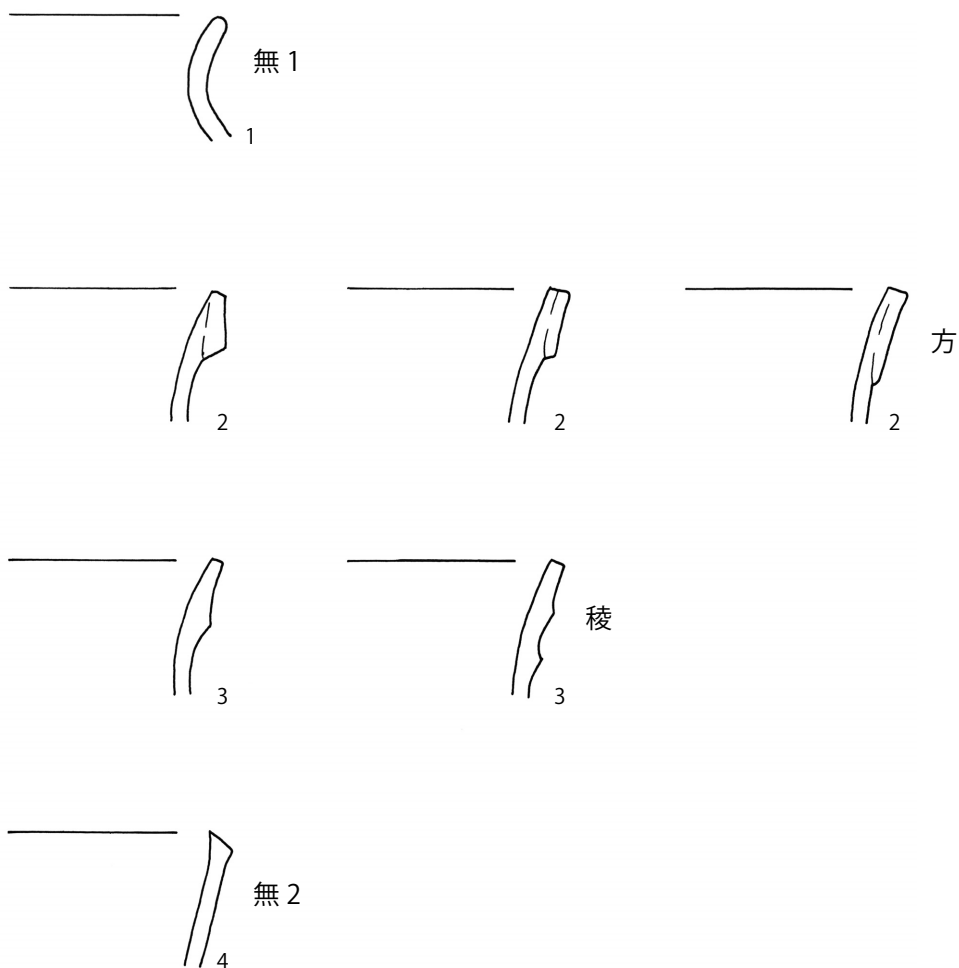
表 1 口縁部文様要素分類一覧表

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年



番号	略号	名称	説明
1	直下	口唇の直下	口唇の直下に文様を水平に巡らせる。刺突文系文様に特有の施文位置。複数の文様要素が併存する場合でも、刺突文系文様がこの位置に施文されている場合はここに分類する
2	屈曲	頸部の屈曲部	口唇部よりかなり下の、頸部の屈曲部に文様を水平に巡らせる。刺突文系文様に特有の施文位置。複数の文様要素が併存する場合でも、刺突文系文様がこの位置に施文されている場合はここに分類する
3	下縁	肥厚帯の下縁	断面方形もしくは稜状の肥厚帯の、下縁部にのみ文様を巡らせる。口唇部外縁にも施文される例は4に分類する。刻文系文様に特有の施文位置
4	面	口縁部の面	1～3以外。すなわち、肥厚帯の有無とは無関係に、口縁部の全面もしくは一部に水平方向に文様が施文される。多くの場合、文様要素列は複数になる。沈線文系文様に特有の施文位置であるが、刻文系文様がこの施文位置に施される場合も多い。なお、刺突文系文様が1・2以外の位置に施文される場合はここに分類する
5	無	施文なし	口縁部に施文がないもの

図 4 口縁部施文位置の分類



番号	略号	名称	説明
1	無1	肥厚帯なし (1)	肥厚帯を持たないもののうち、口唇部近くで緩やかに外反する例。口唇面は丸みを帯び、面取りはない。刺突文系文様と結びつく
2	方	断面が方形もしくは三角形の肥厚帯	断面が方形、もしくは三角形の肥厚帯を有する例。断面がやや厚手のものから、薄くて幅広のものまで多少の変異がある。肥厚帯の段数は1段が多い。壺型の器形と結びつく例が多い
3	稜	断面が稜状の肥厚帯	口縁部の下縁部分に薄手で断面が稜状の肥厚帯を有する例。紐状の粘土を貼り付けて稜部分を作る例と、ナデ等の調整によって稜部分を作る例の両方がある。肥厚帯の段数は1段のほか、複数の段を持つ例も多い
4	無2	肥厚帯なし (2)	肥厚帯を持たないもののうち、口縁部が直線的に立ち上がる例。大きく緩やかに外反したり、口唇部近くで内灣する例もある。口唇面に面取りが施され、外傾する例が多く見られる。刺突文系以外の文様と結びつく

図 5 口縁部肥厚帯の分類

「直下」・「屈曲」は刺突文系文様、「下縁」は刻文系文様にそれぞれ特有の施文位置である。「面」は複数の文様列が口縁部の広い面積にわたって施文される例を基本とする。沈線文系文様に特有の施文位置であるが、刻文系文様が施文される例も少なからず存在する。なお、刺突文系文様が「直下」・「屈曲」の位置以外に施文されている例は「面」に含めた。

ここでは図 4-5 の「施文なし」を除いた図 4-1（「直下」）から図 4-4（「面」）までを旧→新の配列として仮設しておく。

口縁部肥厚帯の形（図 5）

大井の「器形」分類では、器形のモデルを設定し、実際の器形がどのモデルに最も近いかを判別するという方法を用いている。しかしこの方法は判別が主観的になりやすく、また、分類の基準に複数の属性（土器のプロポーショナル、肥厚帯の有無等）が採用されているため判別基準がわかりにくい、という問題がある。よって、ここでは大井の「器形」に関する諸属性を、「口縁部肥厚帯の形」と「プロポーショナル」の二種類に分けて再構成する。

口縁部肥厚帯の形については図 5 のように分類する。「無 1」と「無 2」は本来「肥厚帯なし」として一括すべきかも知れないが、型式組列を編年上有効なものとするために断面形によって分けた。

ここでは図 5-1（「無 1」）から図 5-4（「無 2」）までを旧→新の配列として仮設しておく。

土器上半部のプロポーショナル（図 6）

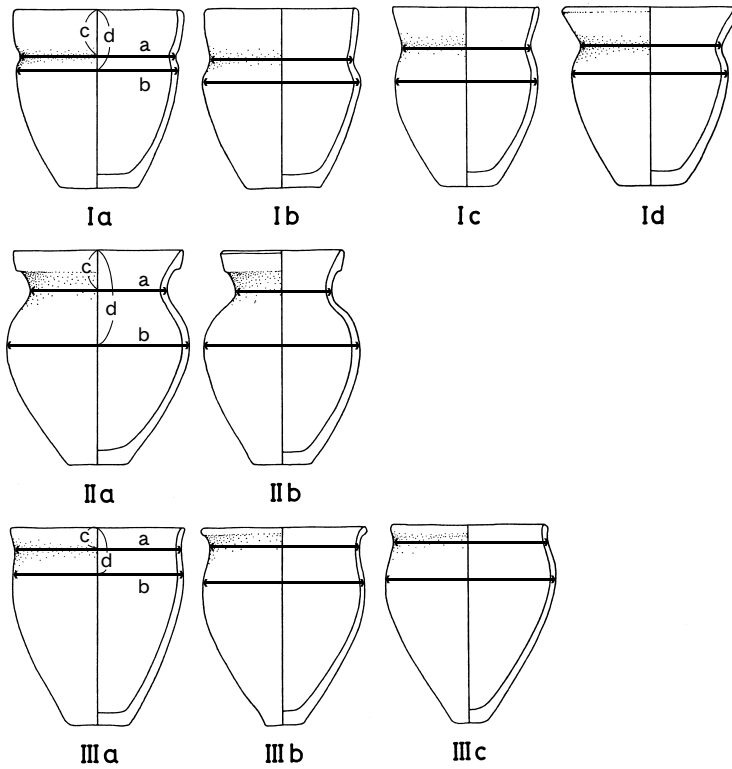
プロポーショナルの分類には、モデルではなく計測値による比率尺度を用いる。完形土器が少なく上半部しか遺存していない例が多いので、土器上半部のプロポーショナルのみを分析対象とする。

図 6 のように頸部の最も括れた部分の径を a、胴部最大径を b、口縁部から a までの高さを c、口縁部から b までの高さを d とし、頸部の括れ度合い (a/b) と口縁部の高さ比 (c/d) を算出する⁶⁾。大井のモデルに従えば、古い方から大井のⅢ群 (a/b が大きく c/d が小さい) →Ⅱ群 (a/b と c/d がともに小さい) →Ⅰ群 (a/b と c/d がともに大きい)、という型式変化が想定できる。

実際の土器の計測値をプロットしたのが図 6 のグラフである。データの分布は散らばっており、グループ別の凝集は形成されていない。すなわちプロポーショナルの変異は漸移的になるので、分類は任意の基準で行うことになる。ここでは時系列に沿った変化を把握するため、プロポーショナル以外の属性との相関を参考に分類基準を設定する。

プロポーショナルと他の属性の相関関係を示したのが図 7 のグラフである。大井のモデルから予測された器形変化との相関が強いのは、文様要素（図 7 上段のグラフ）と口縁部施文位置（図 7 中段のグラフ）である。この二者のうち各グループ別の凝集がより明確なのは後者すなわち口縁部施文位置との相関であるので、これを分類基準に採用する。

口縁部施文位置の「直下・屈曲」例と「下縁」例、「下縁」例と「面」例の各 2 グループ間に対して線形判別関数を用いた判別分析⁷⁾を行うと、図 8 のようになる。グラフ中の境界線に挟まれた四つの領域を A・B・C・D とすると、領域 C は「下縁」、領域 D は「面」を主体とする領域となる。領域 A では「直下」・「屈曲」と「面」が共存するが、器形全体の類似を示すものではないと考えら



くびれ度 $=a/b$ 高さ比 $=c/d$

器形 I と II の判別はくびれ度と高さ比で、II と III の判別はくびれ度で、I と III の判別は高さ比で行えると仮定できる

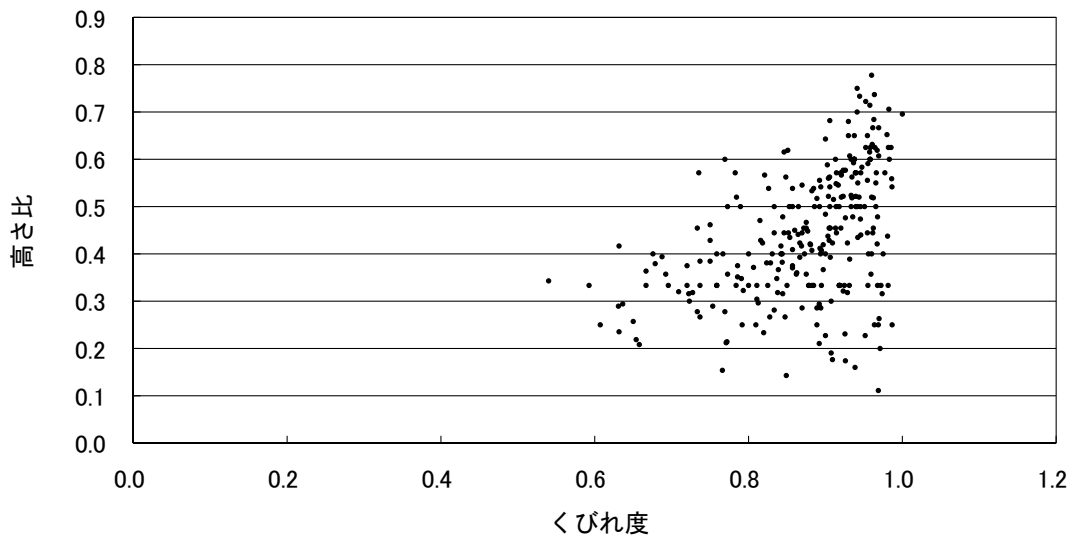


図 6 器形（土器上半部プロポーション）の分類

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年

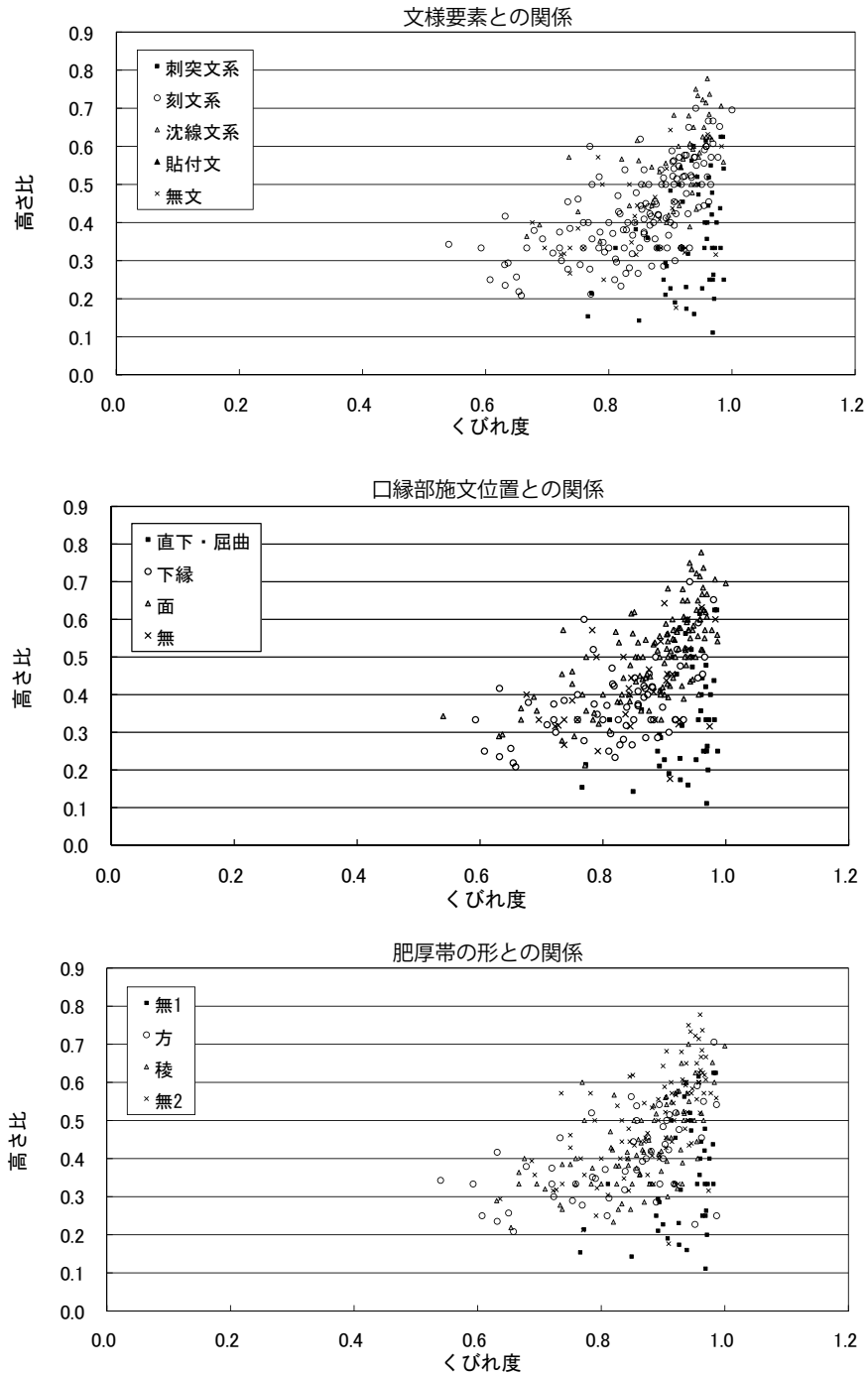
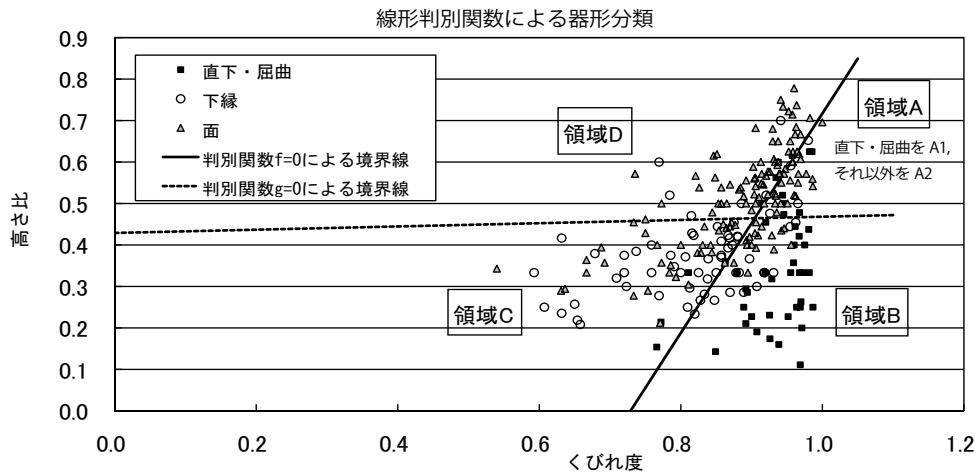


図 7 器形と他の属性との相関



くびれ度 a/b を x 、高さ比 c/d を y としたとき

直下・屈曲グループと下縁グループの正準判別関数 $f=13.443x-5.083y-9.800$

下縁グループと面グループの正準判別関数 $g=-0.375x+9.192y-3.947$

※ $f \cdot g$ とも係数は標準化されていないもの

標準化された正準判別関数係数

	f	g
くびれ度 a/b	1.079	-0.033
高さ比 c/d	-0.605	1.020

※直下・屈曲／下縁の判別ではくびれ度が、下縁／面グループの判別では高さ比が重要な説明変量と言える

正準判別関数による分析結果1

		判別関数による予測		合計
		直下・屈曲	下縁	
元データ	直下・屈曲	37 (82.2%)	8 (17.8%)	45 (100.0%)
	下縁	14 (21.9%)	50 (78.1%)	64 (100.0%)

※元データのうちの79.8%が判別関数により正しく分類された

正準判別関数による分析結果2

		判別関数による予測		合計
		下縁	面	
元データ	下縁	51 (79.7%)	13 (20.3%)	64 (100.0%)
	面	41 (31.5%)	89 (68.5%)	130 (100.0%)

※元データのうちの72.2%が判別関数により正しく分類された

図 8 線形判別関数による器形分類

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年

		口縁部施文位置					計
		直下	屈曲	下縁	面	無	
口縁部文様要素	突	3 (100.0%)					3 (100.0%)
	円瘤	49 (80.3%)	9 (14.8%)		3 (4.9%)		61 (100.0%)
	円平	8 (66.7%)	2 (16.7%)		2 (16.7%)		12 (100.0%)
	円刻	2 (14.3%)	4 (28.6%)		8 (57.1%)		14 (100.0%)
	爪2			27 (75.0%)	9 (25.0%)		36 (100.0%)
	刻斜			36 (57.1%)	27 (42.9%)		63 (100.0%)
	爪1			21 (44.7%)	26 (55.3%)		47 (100.0%)
	型			7 (41.2%)	10 (58.8%)		17 (100.0%)
	刻刻			5 (20.8%)	19 (79.2%)		24 (100.0%)
	刻横			2 (11.1%)	16 (88.9%)		18 (100.0%)
	沈刻				50 (100.0%)		50 (100.0%)
	摩				17 (100.0%)		17 (100.0%)
	沈				15 (100.0%)		15 (100.0%)
	貼				1 (100.0%)		1 (100.0%)
	無					41 (100.0%)	41 (100.0%)
計		62 (14.8%)	15 (3.6%)	98 (23.4%)	203 (48.4%)	41 (9.8%)	419 (100.0%)

		口縁部肥厚帯の形				計
		無1	方	稜	無2	
口縁部文様要素	突	3 (100.0%)				3 (100.0%)
	円瘤	54 (80.3%)	4 (6.6%)	3 (4.9%)		61 (100.0%)
	円平	9 (75.0%)	2 (16.7%)	1 (8.3%)		12 (100.0%)
	円刻	4 (28.6%)	2 (14.3%)	8 (57.1%)		14 (100.0%)
	爪2		14 (38.9%)	20 (55.6%)	2 (5.6%)	36 (100.0%)
	刻斜		20 (31.7%)	37 (58.7%)	6 (9.5%)	63 (100.0%)
	爪1		13 (27.7%)	26 (55.3%)	8 (17.0%)	47 (100.0%)
	型		4 (23.5%)	7 (41.2%)	6 (35.3%)	17 (100.0%)
	刻刻		4 (16.7%)	9 (37.5%)	11 (45.8%)	24 (100.0%)
	刻横		4 (22.2%)	7 (38.9%)	7 (38.9%)	18 (100.0%)
	沈刻		6 (12.2%)	7 (14.0%)	37 (74.0%)	50 (100.0%)
	摩			1 (5.9%)	16 (94.1%)	17 (100.0%)
	沈				15 (100.0%)	15 (100.0%)
	貼				1 (100.0%)	1 (100.0%)
	無			11 (26.6%)	27 (65.9%)	41 (100.0%)
計		70 (16.7%)	76 (18.1%)	137 (32.7%)	136 (32.5%)	419 (100.0%)

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部文様要素	突		2 (100.0%)				2 (100.0%)
	円瘤	4 (7.7%)	43 (82.7%)	4 (7.7%)	1 (1.9%)		52 (100.0%)
	円平	2 (20.0%)	6 (60.0%)		2 (20.0%)		10 (100.0%)
	円刻	1 (12.5%)	2 (25.0%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)		8 (100.0%)
	爪2		4 (19.0%)	10 (47.6%)	2 (9.5%)	5 (23.8%)	21 (100.0%)
	刻斜		10 (27.0%)	20 (54.1%)	5 (13.5%)	2 (5.4%)	37 (100.0%)
	爪1		9 (24.3%)	11 (29.7%)	5 (13.5%)	12 (32.4%)	37 (100.0%)
	型		2 (20.0%)	2 (20.0%)	1 (10.0%)	5 (50.0%)	10 (100.0%)
	刻刻		5 (26.3%)	5 (26.3%)	5 (26.3%)	4 (21.1%)	19 (100.0%)
	刻横		2 (13.3%)		5 (33.3%)	8 (53.3%)	15 (100.0%)
	沈刻		2 (6.1%)	4 (12.1%)	3 (9.1%)	24 (72.7%)	33 (100.0%)
	摩			1 (14.3%)	2 (28.6%)	4 (57.1%)	7 (100.0%)
	沈		2 (25.0%)	1 (12.5%)	1 (12.5%)	4 (50.0%)	8 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

		口縁部肥厚帯の形				計
		無1	方	稜	無2	
口縁部施文位置	直下	60 (96.8%)		2 (3.2%)		62 (100.0%)
	屈曲	10 (66.7%)	3 (20.0%)	2 (13.3%)		15 (100.0%)
	下縁		44 (44.9%)	54 (55.1%)		98 (100.0%)
	面		26 (12.8%)	68 (33.5%)	109 (53.7%)	203 (100.0%)
	無		3 (7.3%)	11 (26.8%)	27 (65.9%)	41 (100.0%)
	計	70 (16.7%)	76 (18.1%)	137 (32.7%)	136 (32.5%)	419 (100.0%)

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部施文位置	直下	5 (8.8%)	47 (82.5%)	3 (5.3%)	2 (3.5%)		57 (100.0%)
	屈曲	1 (11.1%)	5 (55.6%)	1 (11.1%)	2 (22.2%)		9 (100.0%)
	下縁		11 (17.2%)	40 (62.5%)	10 (15.6%)	3 (4.7%)	64 (100.0%)
	面	1 (0.8%)	26 (20.2%)	15 (11.6%)	22 (17.1%)	65 (50.4%)	129 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

		プロポーション					計
		A1	B	C	D	A2	
口縁部肥厚帯の形	無1	6 (9.7%)	50 (80.6%)	3 (4.8%)	3 (4.8%)		62 (100.0%)
	方	1 (2.0%)	7 (14.3%)	25 (51.0%)	7 (14.3%)	9 (18.4%)	49 (100.0%)
	稜		19 (24.4%)	25 (32.1%)	14 (17.9%)	20 (25.6%)	78 (100.0%)
	無2		13 (18.6%)	6 (8.6%)	12 (17.1%)	39 (55.7%)	70 (100.0%)
計		7 (2.7%)	89 (34.4%)	59 (22.8%)	36 (13.9%)	68 (26.3%)	259 (100.0%)

表2 属性のクロス集計表

れる⁸⁾。よって領域Aの土器のうち「直下」・「屈曲」のものをA1、それ以外のものをA2とする。一方領域Bでは「直下」・「屈曲」を主体としながら「下縁」も共存する。この共存は漸移的变化をあらわす可能性がある。

以上、領域Aの土器は施文位置を基準にプロポーションA1とA2に分け、領域B・C・Dの土器はそのままプロポーションB・C・Dと読み替え、計5種類の分類項目を設定する。旧→新の序列はA1・B→C→D・A2と仮定されよう⁹⁾。

(2) 属性の組み合わせと細別型式の設定

4種類の属性をクロス集計したのが表2である。古手の属性は別の古手の属性と、新手の属性は別の新手の属性と結びつく傾向にあり、各種類の序列間に不整合はほとんど生じていない。意図的に属性間の相関が強くなるよう設定した分類もあるので、この結果はある部分では当然ではあるが、前節で仮設した属性の新旧関係は検証できたといえる¹⁰⁾。すなわち、いずれの属性も型式細別の指標として有効であることが立証されたといえよう。

次にこれら各属性の組み合わせに基づき細別型式を設定する。まずは頻繁に見られる属性の組み合わせパターンを抽出してみよう。4種類の属性全ての組み合わせパターンと該当する個体数を示したのが表3である。個体数の分布傾向をまとめてみよう。

- a) 刺突文系文様のグループでは、文様要素「刺突文系」・施文位置「直下」・肥厚帯「無1」・器形「B」の組み合わせが圧倒的に多い。図8のグラフに見たように「直下」の個体の場合、プロポーション「B」と「A1」は同一カテゴリー（判別関数fによる境界線の右側）であるから、器形「A1」も同一グループとしてよい。これらの組み合わせ、すなわち「刺突文系」・「直下」・「無1」・「A1」または「B」を「刺突文系パターン」とする。
- b) 刻文系の文様を持つグループでは、刺突文系・沈線文系のグループと比べて分布が分散している。しかし上位4組の組み合わせは、文様要素「刻文系」・施文位置「下縁」・肥厚帯「方」または「稜」・プロポーション「C」と、文様要素「刻文系」・施文位置「面」・肥厚帯「稜」または「無2」・プロポーション「A2」の二種類にまとめられる。図8のグラフに見たように、「下縁」の個体におけるプロポーション「B」と「C」、「面」の個体におけるプロポーション「D」と「A2」はそれぞれ同一カテゴリー（判別関数gによる境界線の上／下）であるから、前者の組み合わせは、「刻文系」・「下縁」・「方」または「稜」・「B」または「C」、後者の組み合わせは「刻文系」・「面」・「稜」または「無2」・「D」または「A2」にまとめ直すことができる。まとめ直した前者を「刻文系パターンⅠ」、後者を「刻文系パターンⅡ」とする。刻文系パターンⅠとⅡでは、前者が古く後者が新しいと想定できる。両パターンにおける文様要素の内容をより詳しくみたのが表4であるが、ここにあらわれた文様要素の組成差も、パターンⅡの方が新しいという想定と矛盾しない。なお、表4では刻文系パターンⅠに「刻横」が含まれない点について特に注目しておきたい。

香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年

文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション	個体数	各文様要素内での割合	分類		
刺突文系文様	直下	無1	A1	5	6.9%	(刺突文系パターンへ追加)		
			B	47	65.3%	刺突文系パターン		
			C	2	2.8%			
			D	1	1.4%			
		稜	C	1	1.4%			
			D	1	1.4%			
			屈曲	無1	A1	1	1.4%	
					B	3	4.2%	
	C	1			1.4%			
	D	2			2.8%			
	方	B		2	2.8%			
		面		方	A1	1	1.4%	
					D	2	2.8%	
				稜	B	1	1.4%	
	C		1		1.4%			
	D	1	1.4%					
刺突文系文様計				72	100.0%			
刻文系文様	下縁	方	B	2	1.4%	(刻文系パターンⅠへ追加)		
			C	22	15.8%	刻文系パターンⅠ		
			D	5	3.6%			
			A2	2	1.4%			
		稜	B	9	6.5%	(刻文系パターンⅠへ追加)		
			C	18	12.9%	刻文系パターンⅠ		
			D	5	3.6%			
			A2	1	0.7%			
		面	方	B	2	1.4%		
				C	3	2.2%		
				A2	4	2.9%		
				稜	B	8	5.8%	
	C		3		2.2%			
	D		6		4.3%	(刻文系パターンⅡへ追加)		
	A2		17		12.2%	刻文系パターンⅡ		
	無2		B	11	7.9%			
		C	2	1.4%				
		D	7	5.0%	(刻文系パターンⅡへ追加)			
		A2	12	8.6%	刻文系パターンⅡ			
刻文系文様計				139	100.0%			
沈線文系文様	面	方	B	1	2.1%			
			A2	3	6.3%			
		稜	B	1	2.1%			
			C	2	4.2%			
			D	1	2.1%			
			A2	2	4.2%			
		無2	B	2	4.2%			
			C	4	8.3%			
			D	5	10.4%	(沈線文系パターンへ追加)		
			A2	27	56.3%	沈線文系パターン		
沈線文系文様計				48	100.0%			
総計				259				

表 3 属性の組み合わせパターン

		口縁部文様要素						計
		爪2	刻斜	爪1	型	刻刺	刻横	
組 み 合 わ せ	刻文系Ⅰ	12 (24.0%)	20 (40.0%)	13 (26.0%)	2 (4.0%)	3 (6.0%)		50 (100.0%)
	刻文系Ⅱ	3 (7.1%)	4 (9.5%)	14 (33.3%)	3 (7.1%)	7 (16.7%)	11 (26.2%)	42 (100.0%)

表 4 刻文系パターンⅠ・パターンⅡにおける口縁部文様要素の組成差

細別型式	文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション
刺突文群	「円刻」を除く刺突文系文様	直下	無1	A1・B (B主体)
刻文Ⅰ群	「刻横」を除く刻文系文様	下縁	方・稜	B・C (C主体)
刻文Ⅱ群	全ての刻文系文様	面	稜・無2	D・A2
沈線文群	全ての沈線文系文様	面	無2	D・A2

表 5 細別型式の定義

c) 沈線文系文様のグループでは、文様要素「沈線文系」・施文位置「面」・肥厚帯「無2」・プロポーション「A2」の組み合わせが多数を占める。刻文系のグループと同様にここでは器形「D」も同一カテゴリー（判別関数 g による境界線の上）としてよいので、これは「沈線文系」・「面」・「無2」・「D」または「A2」にまとめ直すことができる。これを「沈線文系パターン」とする。

抽出した4つのパターンからさらに属性を絞り込み、表5のように刺突文群・刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群の細別型式を設定する（土器図版は図9・図10参照）。絞り込みの目的は各グループ内のバラツキを少なくして型式学的なまとまりを強めることにある。具体的には、刺突文群では「円刻」の個体を除いているが、これは「円刻」が「折衷的な印象を強く与える」点を重視した結果である¹¹⁾。また、刻文Ⅰ群では「刻横」を除外している。

これら細別型式間の変遷過程を文章で説明すると以下のようなだろう。

刺突文群から刻文Ⅰ群への変化：器形は頸部のくびれの強い壺型に変化し、方形または稜状の口縁部肥厚帯を有するようになる。口縁部文様要素は全て刻文系文様（「刻横」を除く）になる。口縁部文様要素は肥厚帯の下縁部にのみ施文されるようになる。

刻文Ⅰ群からⅡ群への変化：器形は頸部のくびれが弱く口縁部の長い甕形へと変化する。肥厚帯は方形のものがなくなり、肥厚帯を持たない個体も出現する。口縁部文様要素には「刻横」が加わり、口縁部の全面に施文されるようになる。

刻文Ⅱ群から沈線文群への変化：全ての土器から肥厚帯が消滅し、口縁部文様要素が全て沈線文系文様になる。

(3) 各細別型式間の変化のプロセス

各細別型式間の関係をもう少し詳しく見ておこう。属性の組み合わせによって各細別型式を定義したが、表 5 でも確認できるとおり、隣接する型式の間で共通する属性がある。その数は刺突文群と刻文Ⅰ群では 1 種（「B」）、刻文Ⅰ群と刻文Ⅱ群では 2 種（「刻横」以外の文様要素と「稜」）、刻文Ⅱ群と沈線文群では 3 種（「面」・「無 2」・「D・A2」）である。単純な見方をすれば型式間で共通する属性数が多いほど、それら型式間の「類似度」は高いと言えよう。

次は一個体中に異なる段階の属性が共存する土器、すなわち「中間的」な様相の土器の問題である。先に設定した細別型式の定義（属性組み合わせ）を分析対象となった土器全てに対し適用した結果を示したのが表 6 左である。分析資料数 259 個体¹²⁾のうち、68.0%に相当する 176 個体が細別型式の定義と一致した属性組み合わせパターンとなっている。残りの 32.0%は属性の組み合わせが細別型式の定義から外れているが、その内訳を示したのが表 6 右である。4 種の属性中 3 種までが本来の組み合わせで 1 種のみが前段階もしくは次段階の属性となる例（表 6 の「分類」に－または＋が付された例）が多い。隣接する細別型式の属性を 2 種ずつ共有する、「どっちつかず」の個体もある。これらは隣接する型式間の「中間的」な様相を示すものとしてよいであろう。特にこの「中間的」な例が多いのは刻文Ⅰ群とⅡ群の間である。一方、2 段階以上離れた時期の属性が一個体中に共存する例（表 6 の「属性錯綜」）は稀である（全体の 10%以下¹³⁾）。

以上の分析結果から、各型式間の関係をまとめておこう。

- a) 刺突文群と刻文Ⅰ群の間では、分類の指標上共通する属性が少なくだけではなく、「中間的」な個体数も少ない。すなわち両者の間では属性が排他的に分布している。よって両者の「類似度」は低く、変化は非連続的である。
- b) 刻文Ⅰ群とⅡ群の間では、分類指標上共通する属性がやや多く、「中間的」な個体数も特に多い。すなわち両者の「類似度」はやや高く、変化は漸移的である。
- c) 刻文Ⅱ群と沈線文群との間では分類指標上共通する属性が多いので、「類似度」は高く結果的に変化も漸移的といえる。ただし、文様要素の差は見た目の違いが大きいので、「類似度」の高さはそれほど意識されない¹⁴⁾。
- d) 上記 b) c) のように、隣接する型式間では「類似度」・「漸移性」が高い傾向がある一方、刺突文群の属性と刻文Ⅱ群の属性が結びつくなど、2 段階以上離れた時期の属性が共存する例は稀である。このようなあり方は、刺突文群→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群という変化が単線的かつ不可逆的であることを示唆している¹⁵⁾。

ここで重要な点は二点ある。一点は各細別型式間の相対的な「類似度」・「漸移性」が同じではない点である。これは、型式変化のプロセスや速度が一律ではないこと、さらには型式変化をもたらした要因や背景が様々ではない可能性があることを示唆している。もう一点は型式変化の進行過程が単線的かつ不可逆的であると推測される点である。これらは二点とも大井の提起した「型式論的変遷」-二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程-に抵触することになる。これらの問題については、層位的検証を行った後、本稿の最後に検討することに

文様要素	施文位置	肥厚帯の形	プロポーション	個体数	分類
刺突文系文様（「円刻」除く）	直下	無1	A1	4	刺
			B	47	刺
			C	2	刺+
		稜	C	1	刺刻Ⅰ
			D	1	属性錯綜*
	屈曲	無1	A1	1	刺+
			B	3	刺+
			C	1	刺刻Ⅰ
			D	1	属性錯綜*
		方	B	1	刺刻Ⅰ
	面	方	A1	1	属性錯綜
D			1	属性錯綜	
「円刻」	直下	無1	A1	1	刺+
			D	1	属性錯綜*
	屈曲	無1	D	1	属性錯綜*
			B	1	刻Ⅰ-
	面	方	D	1	属性錯綜※Ⅰ
			B	1	属性錯綜※Ⅰ
		稜	C	1	属性錯綜※Ⅰ
			D	1	属性錯綜※Ⅰ
			刺突文系文様計		
刻文系文様（「刻横」除く）	下縁	方	B	2	刻Ⅰ
			C	22	刻Ⅰ
			D	4	刻Ⅰ+
			A2	2	刻Ⅰ+
		稜	B	9	刻Ⅰ
			C	18	刻Ⅰ
			D	5	刻Ⅰ+
			A2	1	刻Ⅰ+
	面	方	B	2	刻Ⅰ+
			C	3	刻Ⅰ+
			A2	3	刻Ⅰ刻Ⅱ
		稜	B	8	刻Ⅱ-
			C	3	刻Ⅱ-
			D	3	刻Ⅱ
		無2	A2	14	刻Ⅱ
			B	9	刻Ⅱ-
			C	2	刻Ⅱ-
			D	6	刻Ⅱ
「刻横」	下縁	方	D	1	刻Ⅰ刻Ⅱ
			A2	1	刻Ⅱ-
	面	稜	D	3	刻Ⅱ
			A2	3	属性錯綜*
		無2	B	2	刻Ⅱ-
			D	1	刻Ⅱ
			A2	4	刻Ⅱ
刻文系文様計				139	
沈線文系文様	面	方	B	1	属性錯綜
			A2	3	属性錯綜
		稜	B	1	属性錯綜*
			C	2	属性錯綜*
			D	1	沈-
			A2	2	沈-
		無2	B	2	属性錯綜*
			C	4	属性錯綜*
			D	5	沈
A2			27	沈	
沈線文系文様計				48	
総計				259	

分類	個体数	割合
刺	51	19.7%
刺+	7	2.7%
刺刻Ⅰ	3	1.2%
刻Ⅰ-	1	0.4%
刻Ⅰ	51	19.7%
刻Ⅰ+	17	6.6%
刻Ⅰ刻Ⅱ	4	1.5%
刻Ⅱ-	25	9.7%
刻Ⅱ	42	16.2%
沈-	3	1.2%
沈	32	12.4%
属性錯綜	23	8.9%
(うちプロポーションのみ)	(13)	(5.0%)
計	259	100.0%

刺・刻Ⅰ・刻Ⅱ・沈は、それぞれ刺突文群・刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群を指す

...4種の属性のうち、3種までは本来の組み合わせと同じだが、1種のみ前段階の属性を含む、という意

+...4種の属性のうち、3種までは本来の組み合わせと同じだが、1種のみ次段階の属性を含む、という意

刺刻Ⅰ・刻Ⅰ刻Ⅱ...前者は刺突文群の属性と刻文Ⅰ群の属性を各々2種ずつ含む。後者は刻文Ⅰ群とⅡ群の属性を各々2種ずつ含む。

属性錯綜...2段階以上段階の異なる属性が共存する。

*はプロポーションのみ「錯綜」の例

「円刻」「屈曲」は本来、刺突文群と刻文Ⅰ群の「中間的」属性であるが、ここでの分類では刻文Ⅰ群の属性として扱った。ただし※Ⅰの例は刻文Ⅱ群以降の属性と結びついているため、属性錯綜として扱っている。

表6 属性の組み合わせパターンと細別型式の関係

する。

4. 道北部の細別型式

香深井 A 遺跡の出土土器を分析し、刺突文群、刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群の4つの細別型式を設定した。しかし、道北部のオホーツク土器にはこれらの型式以前／以後に位置づけられる諸型式も確認されている。ここでは大井「型式論」の問題から一旦離れて、道北部のオホーツク土器編年全体について通観しておこう。

(1) 刺突文群の細別

まずは古い段階の刺突文群土器である。すでに述べたように、刺突文群の文様要素には土器外面からの刺突文（以下 OI 刺突文と略）と内面からの突瘤文（以下 IO 突瘤文と略）がある。IO 突瘤文については香深井 A 遺跡での資料数が少なかったためここまで問題にしなかったが、すでに香深井 A 遺跡の報告中でも IO 突瘤文がより古い傾向にある（古い層ほど IO 突瘤文の割合が多い）ことは指摘されていた（天野 1981）。近年この指摘を裏付けるように、礼文島香深井 5 遺跡 95 年度発掘区（荒川ほか 1997）からまとまった数量の IO 突瘤文の土器が出土している。

ただし香深井 5 遺跡のこの地点では IO 突瘤文の土器のみが出土したのではなく、ほぼ 1 : 1 の割合で OI 刺突文の土器も出土している（天野 1998、天野・小野 2002）。ただし OI 刺突文の土器も含めた香深井 5 遺跡の土器全体を香深井 A 遺跡例と比較すると、器形・胴部文様に関しても以下の差異が認められる。

- a) 香深井 5 遺跡例（図 9-1）の器形は深鉢形であり、頸部が胴部よりくびれる土器はほとんどない。香深井 A 遺跡例でも深鉢形の器形は多いが、頸部が胴部よりくびれる例も散見される。
- b) 香深井 5 遺跡例では口縁部文様帯と胴部文様帯が一带になっており、文様帯幅も狭い例が多い。一方、香深井 A 遺跡例では口縁部／胴部の文様帯が分離している例（図 9-3・4）が多い。
- c) 胴部文様意匠をみると、香深井 5 遺跡例では沈線文の単独施文が特徴的であり、沈線文と刻文が組み合わせられた意匠はきわめて少ない。逆に香深井 A 遺跡例では沈線文の単独施文は稀で、沈線文と刻文が組み合わせられる意匠が多い¹⁶⁾。

両遺跡例の間では特に OI 刺突文の土器について型式学的特徴が重なる部分も多い。しかしここでは IO 突瘤文の存在と上の a) ～ c) の差異を勘案し、香深井 5 遺跡例を刺突文群の前半段階（図 9-1）、香深井 A 遺跡例¹⁷⁾を刺突文群の後半段階（図 9-2 ～ 4）として位置づける。

なお注目すべきは、上の a) ～ c) における香深井 5 遺跡例、すなわち刺突文群の前半段階の特徴がいずれも鈴谷式土器と共通する点である。無論この点だけをもって鈴谷式と IO 突瘤文の土器との直接的な型式連続を断じるわけにはいかないが、特に b) の文様帯の問題などは、両型式の関係を考える上で重要であることは確かである。いずれにしろ上記の a) ～ c) は、香深井 5 遺跡例

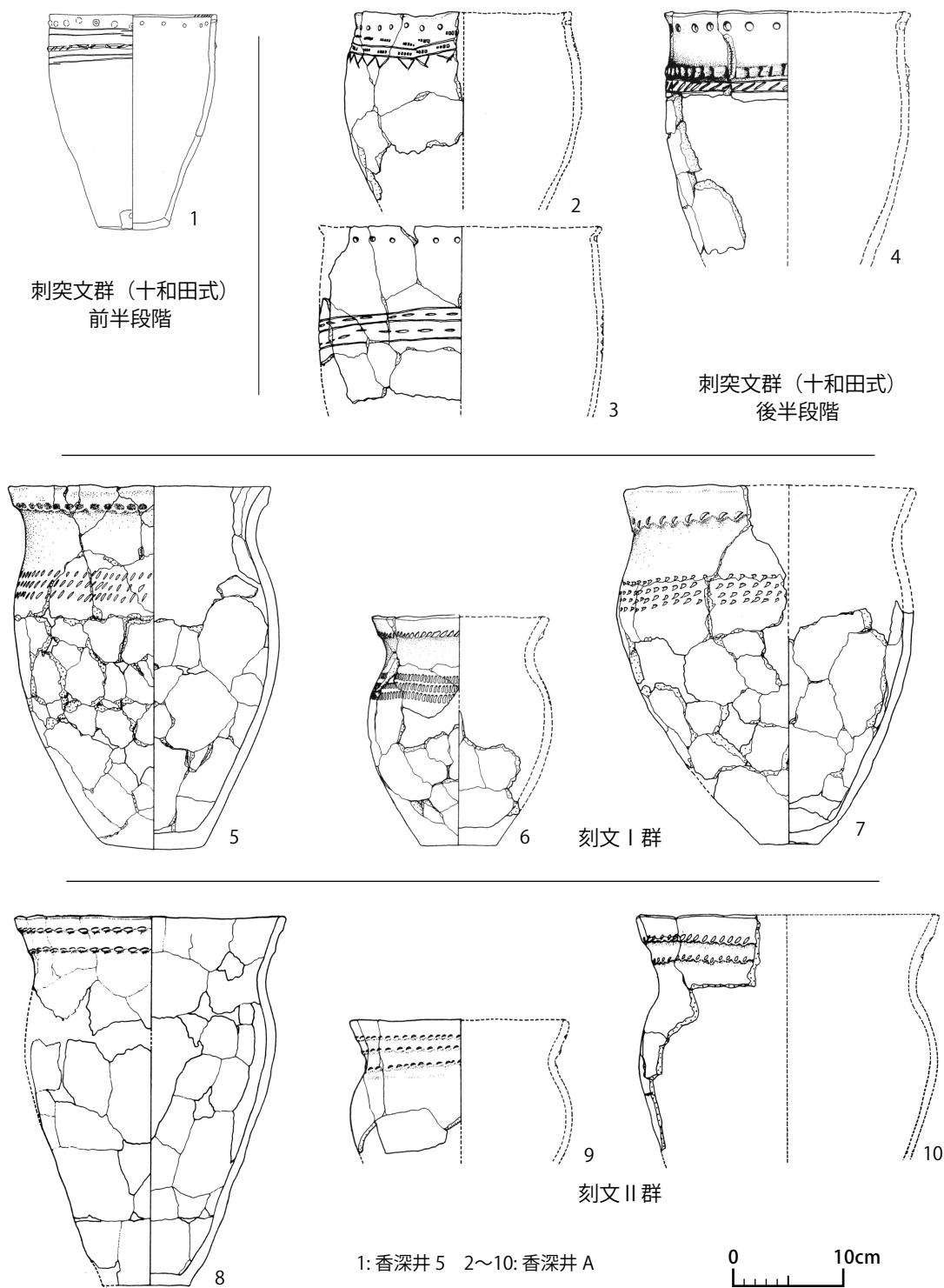
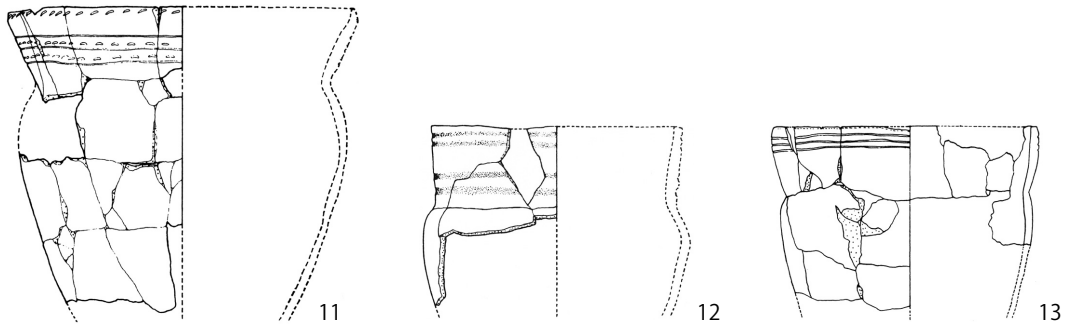
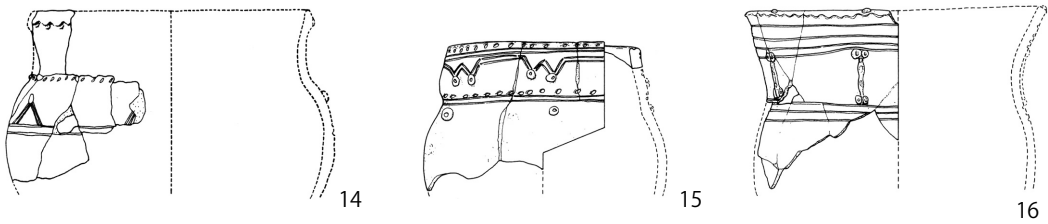


図9 北海道北部のオホーツク土器編年 (1)

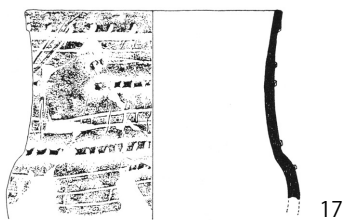
香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年



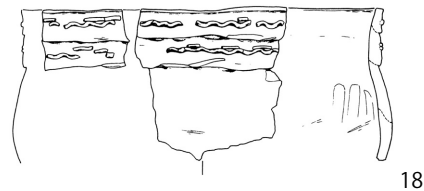
沈線文群 前半段階



沈線文群 後半段階



道東貼付文期前半段階併行



道東貼付文期後半段階併行

11~14: 香深井 A 15・16: 目梨泊 17: 元地 18: 亦稚貝塚



図 10 北海道北部のオホーツク土器編年 (2)

の古さを示す特徴といえることができる。

(2) 沈線文群以後

道北部における沈線文系土器には、香深井 A 遺跡の典型的な沈線文群とはやや異なる土器群がある（図 10-14 ～ 16）。沈線文による鋸歯文・斜線のモチーフをもつもの（佐藤編 1994；柳澤 2001）、貼付文系文様要素を併存するものなどがそれである。このような要素は香深井 A 遺跡では魚骨層 I で出現し、「黒褐色砂質土層」においてより顕著になるように見えるので、相対的に新しい要素と考えられる。

これらの土器群は、道北端部においては礼文島元地遺跡の魚骨層 I（大井 1972）、礼文島浜中 2 遺跡（前田・山浦編 1992）、礼文島ナイロ遺跡（大川 1998）などで確認されているが、いずれも断片的な出土・報告で、型式としてのまとまりや全体像ははっきりしない¹⁸⁾。よって地域差の問題はあるが、より道東部に近い枝幸町目梨泊遺跡（佐藤編 1994）でまとまって出土した例からこれらの土器群（図 10-14 ～ 16）について分析してみる。

目梨泊遺跡などから出土したこれら土器群の特徴をまとめると以下ようになる。

- a) 沈線文系文様が施された土器のうち、4 割弱の個体が貼付文系文様を併存する。
- b) そのような、沈線文系文様と共存する貼付文系文様の多くは小さな円形の粘土瘤を貼り付けた粒状やボタン状の貼付文であり、道東部の貼付文期（熊木 2009, 2010a）に特徴的な細い紐状の貼付文は比較的少数である。
- c) 同じ遺跡からは、道東部の貼付文期前半段階（熊木 2009, 2010a）に位置づけられる土器もまとまって出土する。

a) に述べた貼付文系文様を併存する土器は地域差として捉えうる可能性もあるが、香深井 A 遺跡などの状況から時期差と考えておきたい。b) と c) は道東部の状況から推測すると、貼付文期前半段階との時期差を示すものとして捉えることが可能であろう¹⁹⁾。

このように目梨泊遺跡や香深井 A 遺跡での状況から推測すると、道東部の貼付文系文様の影響が道北部に波及する時期は、沈線文群の初期からではなく後半以後である可能性が高い²⁰⁾。この点は編年対比上きわめて重要であり、道北部と道東部の編年対比を正確に行うためには、沈線文群に前半・後半の細別を設定しておくことが望ましい。ただし別型式とするだけの根拠（層位や遺跡ごとのはっきりとしたまとまり）は不十分であるので、ここでは香深井 A 遺跡の典型的な沈線文群を沈線文群土器の前半段階（図 10-11 ～ 13）、目梨泊例などの新しい要素を持つ例を沈線文群の後半段階（図 10-14 ～ 16）として仮設する。

これ以後の道北端部（礼文島・利尻島・宗谷地域）では、道北部独自の系統は影を潜めて道東部の系統（筆者が貼付文期とした土器群）に呑み込まれるようになり、元地式土器（熊木 2000b, 2010b）が出現するまで道北部独自の系統は顕在化しなくなる。土器の出土量もやや減少するようであり、活動が低調になった可能性が考えられる。ちなみに道北端部におけるこの時期の資料（貼

付文期の貼付文系土器)は、前述の礼文島元地遺跡・ナイロ遺跡・浜中 2 遺跡、利尻島亦稚貝塚、稚内市オンコロマナイ貝塚等、各地でやや少数ながら散見されている(図 10-17・18)。この時期における土器型式の変化や出土量の退潮については、道北部オホーツク文化集団の衰退や、道東部との関係緊密化と関連するものとして注目しておきたい。

(3) 細別型式の設定

本論で検討した道北部の細別型式をまとめると以下のようになる(図 9・図 10)。

- ・刺突文群(前半段階・後半段階)
- ・刻文Ⅰ群
- ・刻文Ⅱ群
- ・沈線文群(前半段階・後半段階)
- ・道東部の貼付文期に併行する土器群(前半段階・後半段階)

5. 各型式の層位的検討

(1) 各遺跡での層位的出土状況

次に各細別型式の層位的出土状況について検討する。

表 7 は本論で設定した細別型式が、香深井 A 遺跡の各魚骨層から何点出土しているかを示した表である。仮に香深井 A 遺跡の各層位が各々全て廃棄の同時性を示していて、他の層位からの混入はないとみるならば、本論のように細別型式を設定したとしても、大井の提起した「二つ以上の細別型式の共伴」が正しいと判断せざるを得ない。しかし本論の冒頭で述べたように、2 段階以上離れた細別型式の「共伴」(例えば表 7 の魚骨層Ⅱで認められるような刺突文群と沈線文群の「共伴」)は、本当に他の遺跡でも認められるのであろうか。あるいは逆に、各細別型式が単独で、もしくは隣接する型式を伴わずに出土する例はないのであろうか。以下では後者の疑問点について、サハリンや道東部を含めた各遺跡の出土状況から検証する²¹⁾。

(a) 出土パターン 1: 刺突文群のみ出土する遺跡・遺構・出土地点

サハリン十和田遺跡(伊東 1942・伊東 1982)

この遺跡から出土した十和田式の標式資料となった土器群は、量的には「僅少」(伊東 1982)であるが、「鈴谷式や江の浦 B 式を混じへることはない」(伊東 1942)とされている。これらの土器群は、報告された図版で見る限り、本論でいう刺突文群の前半段階・後半段階の両方に相当するようである。資料の規模や全体像が不明な点に問題は残るが(大井 1982: (上) 注 47)、刺突文群の単独出土例として扱っておきたい。

礼文島香深井 5 遺跡 95 年度発掘区(荒川ほか 1997)

前述の、刺突文群前半段階の標式遺跡である。報告書分類のⅡ群 A 類土器が刺突文群に相当する

層位	土器分類												計
	沈	属性錯綜 (沈)	刻Ⅱ	刻Ⅱ-	刻Ⅰ刻Ⅱ	刻Ⅰ+	刻Ⅰ	刻Ⅰ-	属性錯綜 (刺)	刺刻Ⅰ	刺+	刺	
魚骨層Ⅰ	13	3	3	1	1	1							22
魚骨層Ⅱ	16	4	19	6	3	3					1	2	54
魚骨層Ⅲ0			3	4		3	4		4				18
魚骨層Ⅲ		3	3	4		1	4	1	2		1	1	20
魚骨層Ⅳ			1	3		3	23		1	1	4	18	54
魚骨層Ⅴ										1		5	6
計	29	10	29	18	4	11	31	1	7	2	6	26	174

表 7 香深井 A 遺跡各魚骨層における細別型式の出土数

が、これが全出土点数（口縁部で 916 点）の約 95%を占めるという。残りの 5%の中には刻文Ⅰ群・Ⅱ群土器も含まれるようだが、刺突文群が出土した第Ⅳ層からの出土は刻文Ⅰ群（？）が 1 点のみである。刺突文群前半段階の、ほぼ単純な出土地点とみてよいであろう。

枝幸町ウバトマナイチャシ堅穴住居址（右代ほか 1998）

報告が概報のため土器図版がなく詳細は不明であるが、出土土器 1,137 点のうち、多くが「オホーツク式土器前期はじめのもの」²²⁾で、それ以外のオホーツク土器は出土していないと報告されている。土器の具体的内容については、「刺突文系の土器群でサハリンの十和田式に対応」し、「外側からの円形刺突文」が施文されており、「内側からの円形刺突文は、1 点も見られなかった」とあるので、筆者分類の刺突文群後半段階に相当するとみられる。刺突文群後半段階の単純遺跡としてよいであろう。

枝幸町川尻北チャシ 2 号堅穴（大場ほか 1972）

本例も概報のみのため詳細は不明であるが、報告によれば、「堅穴床面及び埋土のオホーツク文化期の資料は、（中略）全体として、一つのグループと考えてよい」とされ、具体的には、「樺太におけるいわゆる十和田式土器につながるもの」と述べられている。提示された図版（完形・口縁部で計 38 点）から判断する限り、刺突文群前半段階が若干含まれるようであるが、多くの土器は刺突文群後半段階に位置づけられるように思われる。いずれにしろ刺突文群の単純遺跡と見てよいであろう。

(b) 出土パターン 2：刺突文群を伴わず、刻文Ⅰ群段階以降の土器が出土する遺跡・遺構・出土地点 ホロベツ砂丘遺跡（佐藤編 1985）

第 1 号住居址に伴う刻文Ⅰ群土器のほか、発掘区からは刻文Ⅰ群、刻文Ⅱ群、沈線文群のほか貼付文系土器群も出土している（掲載点数は完形・口縁部で計 55 点）。しかし刺突文群は全く報告されていない。

網走市モヨロ貝塚（米村 1950；大場 1956；駒井編 1964；市立函館博物館編 1983；網走市郷土博物館編 1986；米村編 2009）

最近、刻文期の土器に刺突文が施されたものとみられる土器がごく少数確認されたが（熊木 2009：310）、これらの例を含めて筆者が調査した限りにおいて出土土器は全て刻文Ⅰ群併行以降であり、刺突文群そのものといえる土器は確認されていない。

羅臼町相泊遺跡（澤ほか 1971、涌坂編 1996）

新手の貼付文系土器を伴う住居址 1 軒と、刻文Ⅰ群・Ⅱ群期に併行する墓が各 1 基ずつ検出されている。出土した土器（澤ほかによる報告書 [1971] では「文様のある土器」は 201 点、涌坂編の報告書 [1996] では掲載点数が 32 点）は刻文Ⅰ群併行の土器が多数を占めており、刻文Ⅱ群併行土器が続く。新手と見られる貼付文系土器も出土している。しかし住居址・発掘区のどちらからも刺突文群は全く確認されていない。

羅臼町舟見町高台遺跡（本田ほか 1980）

1976 年度の調査では、炉址状遺構および発掘区から刻文Ⅰ群及びⅡ群期に併行する土器が出土している（報告書掲載点数は完形と口縁部で 54 点）。他に出土したオホーツク文化関連の土器は住居址に伴うトビニタイ土器のみであり、刺突文群は確認されていない²³⁾。

根室市トーサムボロ遺跡 L-1 地区北側（北構・須見 1953・北構ほか 1984）

堅穴住居址群と小貝塚群からなる遺跡で、小貝塚群（北構・須見 1953）と、刻文Ⅰ群もしくはⅡ群期に併行する土器を伴う住居址 1 軒（北構ほか 1984）が調査されている。小貝塚群出土の土器（計 213 点）は道北部とはやや異なっており地域差を有するようであるが、ほぼ全例が刻文Ⅰ群・Ⅱ群に併行するとみられる。堅穴住居址出土の土器は図示されておらず点数も不明だが、覆土・床面とも「舟形刻文・太い貼付文を有する土器であり、所謂ソーメン文土器は一点も出土しなかった」と報じられている（北構ほか 1984：227）。この土器群は刻文Ⅰ群もしくはⅡ群に併行するものであろう。いずれにしろ刺突文群は全く報告されていない。

(c) 出土パターン 3：刻文Ⅰ群を伴わず、刻文Ⅱ群以降のみ出土する遺跡・遺構・出土地点

香深井 6 遺跡魚骨ブロック 5・6（前田・藤沢編 2001）

魚骨ブロック 5 は短径約 5m（長径は調査区外に延び不明）・厚さ 60cm 弱、魚骨ブロック 6 は短径約 3m（長径は調査区外に延び不明）・厚さ 40cm 弱で、間層を挟み同一地点に重なって堆積しており、前者が新しく後者が古い。魚骨ブロック 6 で（完形・口縁部掲載点数 14 点）は刻文Ⅱ群と沈線文群前半段階が相半ばする一方、魚骨ブロック 5（完形・口縁部掲載点数 56 点・ただし混入とみられる鈴谷式 1 点を除く）では沈線文群前半段階が大半を占め、刻文Ⅱ群が少量（掲載数では 5 点）出土している。刺突文群土器²⁴⁾、および沈線文群後半段階以後の土器はどちらのブロックからも全く報告されていない。

(d) 出土パターン 4：刻文Ⅱ群の後、遺跡の連続性が絶たれる遺跡・遺構・出土地点

羅臼町相泊遺跡

前項を参照。

羅臼町舟見町高台遺跡

前項および註 23) 参照。

標津町三本木遺跡（北構 1992、工藤 1992）

堅穴の窪み間にトレンチを入れた調査（北構 1992、掲載点数は口縁部破片で 10 点）と、遺跡範

囲確認のためのテストピット試掘（工藤 1992、オホーツク土器の全出土点数 332 点）の報告がなされている。前者の調査で刺突文群が 1 点得られているほか、両調査とも刻文Ⅰ群併行を中心に刻文Ⅱ群併行の土器も出土している。しかし両調査ともそれ以外の型式は出土していない。

根室市トーサムポ遺跡 L-1 地区北側

前項を参照。

(2) 各型式間の時間的關係

以上の検討結果から、各型式間の時間的關係を推定してみよう。

出土パターン 1 と 2 は、刺突文群と刻文Ⅰ群との間にある「非共伴・断絶」の事例—すなわち両型式の時期差—を示している。特に、出土パターン 1 = 刺突文群の単独出土例が確認されている点、パターン 1・2 ともに確認例がやや多い点は、刺突文群と刻文Ⅰ群が基本的には共伴しない²⁵⁾ことを明確に示している。

一方、出土パターン 3 は刻文Ⅰ群とⅡ群との間に存在する同様の時期差を示している。また出土パターン 4 も、間接的にはあるが、刻文Ⅱ群とそれ以降の土器群（道北部では沈線文群前半、道東部では沈線文期前半の土器群）との間にある同様の時期差を示唆している。このように刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の關係も基本的に時期差である蓋然性が極めて高いが、各型式が単独で出土する例が確認されていない²⁶⁾点には注意すべきであろう。すなわち、各細別型式が単独で一時期を形成していることを端的に示す証拠はないのが現状である。むしろ、隣接する型式を伴って出土するのが常態である、という可能性が高いとすらいえる。

しかしながら、大井「型式論」で述べられたような、2 段階以上離れた細別型式の「共伴」例は、香深井 A 遺跡以外では確認されていない。同一遺跡内で「混在」する例はあるが、短期間に形成されたとみられる層位内での共伴や、廃棄の同時性が明確である遺構内や遺物集中地点での共伴は、今のところ認められないと筆者は判断している。

以上の検討から各型式間の時間的關係をまとめると、次のようになる。

刺突文群と刻文Ⅰ群との關係：前者から後者への変化は相対的に短い時間で完了し、両型式は基本的には共伴しない。

刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の關係：これら三つの型式間の關係も時期差であるが、変化は相対的にゆっくりと、漸移的に進行する。ただし型式変化は刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群、次に刻文Ⅱ群→沈線文群という順で起こり、共伴するのは隣接する 2 型式のみとなる。すなわち変遷過程は単線的かつ不可逆的であり、刻文Ⅰ群と沈線文群は共伴しない。

層位的検討から導き出された以上の關係は、先に検討した型式学的変化の過程ときわめてよく符合している。筆者が提起した土器型式変化の過程は、層位と型式、両面からのクロスチェックにより立証されたことになろう。

(3) 香深井 A 遺跡の「層位的関係」との齟齬について

以上、道北部の土器型式変化の過程を考察してきたが、本論での結論は、香深井 A 遺跡の層位、並びにそれを根拠に提起された大井の「型式論的変遷」-二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程-とは多くの点で異なるものであった。

実は大井は、筆者が先に検討したような“隣接する型式を伴わずに、比較的単純な形で土器が出土する例”があることを認めている（大井 1982：（上）43-44）。しかし大井はこのような（自説から見れば特異な）出土状況は、「若い世代による移住」の結果生じたとし、それは自説と「決して不整合な関係にあるわけではない」と説明している。しかし、ある世代を境として非連続的に型式が交替する、という状況があったとすれば、型式の「切り替え」は短期間で終了するはずであり、大井が想定するような、長期にわたる複線的な細別型式の「共伴」は生じないことになる（小野 1998b：（上）註 30）。この点に関しては大井の説明には矛盾があろう。

しかしながら、香深井 A 遺跡の「層位的関係」には致命的な欠陥がある、と簡単には決めつけられないこともまた事実であろう。特に大井が指摘した、「上位の層準の資料が下位の層準に混入することは、（中略）本来ありえなかった」点（大井 1982：（上）24）は、各層の堆積状況から見て首肯できる。また大井が述べるように、文様要素と器形のセリエーショングラフ（本論の図 2）が順調に推移する点も、各層位に大規模な混入がなかった、という大井の主張に有利であるかもしれない。

では逆に、香深井 A 遺跡における、小規模な層位間の混入、特に「下位の層準の資料が上位の層準に混入」した可能性を示唆する材料はどの程度あるのだろうか。ここでは以下の点に着目しておきたい。

出土土器群の大多数が破片資料である点

大井が本論の図 2 のデータとして採用した個体数は、文様要素のグラフでは完形を含む口縁部破片数 5757 点、器形のグラフでは器形を復元しうる個体数 361 点である。これは、大井が分析対象とした個体のうちの 93%が「器形の復元できない破片資料」であることを示す。大井は破片資料を含めたこれらの土器群を「廃棄の同時性」を持つ一群としてとらえているが、果たして妥当であろうか。もし、「堅穴住居址とその生活廃棄物投棄の場としての魚骨層」（大場・大井編 1981：501）が対応し、一定の場所に土器がまとまって廃棄され、他の時期・地点からの混入や攪乱がないのであれば、器形復元できる個体の割合がもう少し多くなければならないのではないだろうか。器形復元できない破片資料が多いということは、裏を返せば発掘区外に同一個体の別破片が分散されている可能性が高いということである。だとすれば廃棄後に移動されているか、そもそも廃棄時にまとまって捨てられていないか、いずれかあるいは両者の可能性が疑われる。以上の論理で考えた場合、各層位における「廃棄の同時性」にはなお疑問が残るといえよう。

口縁部から復元された個体数と、底部から復元された個体数に大きな差がある点

各魚骨層の資料中の、口縁部から復元された個体数と、底部からの個体数を魚骨層 I～V までの

各層で比較したとすると、大井が自ら認めるように常に前者が大きく後者が小さい（大場・大井編 1976：746 別表 1）²⁷⁾。オホーツク土器は口径が底径よりも遙かに大きいので、土器が壊れて破片になった場合、破片の数自体はいうまでもなく口縁部の方が多くなる。しかし香深井 A 遺跡報告では口縁部個体に対し同一個体の同定がなされている。その同定に大きな問題はないと仮定した上で、さらに完形に近い個体が同一地点に廃棄されていたとするならば、口縁部と底部の個体数に大きな開きは生じないはずである。逆に言えば底部破片が発掘区外に廃棄されているか、発掘区外から別個体の口縁部破片が混入しているからこそ、「個体復元数のアンバランス」が生じると考えられる。よって「個体復元数のアンバランス」がある香深井 A 遺跡の北大調査区内では、「(他の地点との) 土器破片の混淆」が生じていた可能性が否定しきれない。もしこのような「混淆」があったとすれば、他の地点からの混入資料は同時期である保証はないので、やはり「廃棄の同時性」には疑問が残ることになる。

「層位を越えて接合する例がある」点

大井自らこのような例があることを述べている（大井 1982：（上）注 8・注 12）。

「古い魚骨層を掘りあげて作られた竪穴住居・墓墳等の揚土がどこに・どのように処理されたか」
不明な点（大井 1982：（上）24）

前述した問題点を考慮すれば、これらの「揚土」がより新しい時期の魚骨層に混入している可能性は、大井の想定よりも遙かに多く見積もらねばならないと考えられる。

しかしこれらの問題点をあげつらったところで、結局は「下層から上層への資料の混入がどの程度の頻度で起こっていたかを定量的に考えることは困難」（大井 1982：（上）注 12）である。水掛け論ではなく生産的な議論をするためには、今後、他の遺跡での成果を積み重ね、香深井 A 遺跡の「層位的関係」との対比作業を継続してゆく必要があろう。

ただ本論では、大井「型式論」の根拠は、少なくともオホーツク土器に関しては、香深井 A 遺跡の「層位的関係」のみである点を強調しておきたい。前項までに検討したように、香深井 A 以外の遺跡では大井の説とは矛盾するような出土状況が確認されている例があるし、香深井 A 遺跡の「層位的関係」自体にも再検討の余地が残ることは以上に明らかであろう。

では逆に筆者の型式編年が正しいとした場合、香深井 A 遺跡の各魚骨層の土器群の内容はどのように説明が可能であろうか。多くの問題はあろうが、ここでは破片・無文資料を除いた器形復元可能な資料（表 7）に対してのみ、筆者なりの解釈を試みておきたい。

- a) 魚骨層 V ... 刺突文群後半段階。
- b) 魚骨層 IV ... この層の堆積中に、刺突文群と刻文 I 群の交替が生じる。刻文 II 群は刻文 I 群の成立段階からすでに萌芽的に生じている可能性があるが、全体に占める割合は低い。
- c) 魚骨層 III・III 0 ... 刻文 I 群から II 群へと漸移的に変化する過程。刺突文系の文様は文様要素としては一部残存する（「属性錯綜（刺）」）が、型式としての刺突文群は残存しない。おそらく、この層に認められる「刺」や「刺+」は「混入」であろう。一方、沈線文系の文様は（サハリ

ン以北の) 江の浦式からの影響として例外的に刻文Ⅰ群・Ⅱ群に併用される(「属性錯綜(沈)」)が、この時期にはまだ型式としての沈線文群は成立しない。

- d) 魚骨層Ⅱ・Ⅰ… 刻文Ⅱ群から沈線文群へと漸移的に変化する過程。刻文Ⅰ群は消滅する。これらの層の刺突文群もおそらく「混入」であろう。

6. 結論

(1) 道北部編年の総括

要点を箇条書きにまとめる。

- a) 道北部で出土したオホーツク土器群のなかで質量ともに随一といえるのは香深井 A 遺跡出土土器群である。本章ではその香深井 A 遺跡資料を対象に、文様・器形に関する 4 種の属性(口縁部文様要素・口縁部施文位置・口縁部肥厚帯の形・土器上半部のプロポーション)に関する分析を行った。その結果、これら 4 種の属性の組み合わせにはいくつかのパターンが認められた。それら組み合わせパターンの中の出現頻度の高い上位 4 パターンを基準として、刺突文群・刻文Ⅰ群・刻文Ⅱ群・沈線文群の細別型式を設定した。
- b) 香深井 A 遺跡以前／以後の資料を含めて道北部のオホーツク土器型式全体を再検討すると、以下の細別型式が設定できる。
- ・ 刺突文群 (前半段階・後半段階)
 - ・ 刻文Ⅰ群
 - ・ 刻文Ⅱ群
 - ・ 沈線文群 (前半段階・後半段階)
 - ・ 道東部の貼付文期に併行する土器群 (前半段階・後半段階)

ただしこのうちの沈線文群の後半段階以降については、出土例が少なく、細別型式としてのまとまりがはっきりしていない。

- c) 隣接する細別型式間で型式学的特徴を比較すると、刺突文群と刻文Ⅰ群との差が相対的に大きい一方、刻文Ⅰ群と刻文Ⅱ群、刻文Ⅱ群と沈線文群とでは互いの類似度が高い。また、分類上「どっちつかず」となるような中間的な特徴を持つ土器は、隣接する型式間には認められる。しかし 2 段階以上離れた型式間で属性を折衷する例はきわめて少ない。
- d) 各細別型式の出土状況を見ると、刺突文群のみからなる遺跡、刻文Ⅰ群から始まる遺跡、刻文Ⅱ群から始まる遺跡、刻文Ⅱ群までで一旦断絶する遺跡がある。また、香深井 A 遺跡以外では、2 段階以上離れた細別型式が同層位・遺構内で確実に共伴した例はなく、香深井 A 遺跡の「共伴」もいくつかの点で再検討の余地がある。以上の出土状況は、各細別型式が時期差であることを示している。ただし単独でまとまった出土が確認されたのは刺突文群のみで、刻文Ⅰ群を出土する遺跡では刻文Ⅱ群が、沈線文群を出土する遺跡では刻文Ⅱ群が共伴ないしは混在して出土

している。

- e) c) d) の点からすると、刺突文群→刻文Ⅰ群→刻文Ⅱ群→沈線文群という変化は、単線的かつ不可逆的な進行とみることができる。また、刺突文群から刻文Ⅰ群への変化は非連続的に、一気に交替が進んだようなかたちで進行したと考えられる一方、刻文Ⅰ群から沈線文群までの変化は漸移的に、ゆっくり進行したと推測できる。
- f) 以上の検討結果に従うならば、大井が提起した土器群の「型式論的変遷」-二つ以上の細別型式が共伴しつつ、その組成が漸移的に変化するような変遷過程-は、香深井 A 遺跡出土土器群の実際の型式変化のあり方とは異なっているものと評価される。

(2) 再び大井説について

本論の冒頭で大井の「型式論的変遷」説に対する疑問点を二点あげた。その二点に対する検証過程で明らかになった大井説の問題点について、再度、総括しておこう。

一つは、「層位は型式に優先する」ことを型式設定の前提とした点である。結果として香深井 A 遺跡の「層位的関係」がそのまま「型式論的変遷」の実態として認識されることとなった。これは、層位に関する確実なデータが限られていた当時を考えればやむを得ない部分もあるが、大井自ら意識していたように、当時すでに香深井 A 遺跡の例と抵触するようなデータが他の遺跡から得られていた。本論では最近の調査成果も加えて、香深井 A 遺跡の「層位的関係」と矛盾するような出土状況が存在することをあらためて示し、また、香深井 A 遺跡の「層位的関係」自体にも再検討の余地が残ることを指摘した。

もう一つの問題点は、型式の具体的かつ詳細な内容に踏み込まずに、土器型式を静的か・動的かの単純な二分法で定義・理解しようとした点である。大井は土器型式のあり方として、静的な、すなわち「一定の型式論的特徴を持つ一群の土器が、ある一定の期間その特徴を変えずに存続する」というすがたを否定し、複数の型式論的特徴がそれぞれ漸移的に、常に変化し続ける、という動的なすがたを想定した（大井 1982：（上）36-37）。これに対し筆者は、土器型式の変化の仕方には静的な場合も動的な場合もあるのであって、先験的にどちらか一方に決めてしまうことはできないと考える。実際、本章での分析では刺突文群から刻文Ⅰ群への変化では「静的」に近いあり方が、刻文Ⅰ群以後では「動的」に近いあり方が確認されている。

大井が型式分類の指標とした属性群-「文様要素」と「器形」-は、確かに時間軸に沿って順調に変化する属性を含んでおり、氏がこれらの属性群に着目したこと自体はまさに卓見であった。しかし我々（おそらくは土器製作者自身を含む）が細別型式を認識・弁別する際には、個々の土器の特徴をもう少し細かいレヴェルまで分解して観察し、各種属性の組み合わせによって個体どうしを比較しているのが現実ではないだろうか。本論で分析対象とした属性もわずか 4 種類であり十分とはいえない部分もあるが、その 4 種の属性を組み合わせで型式を設定することで、大井の「型式論的変遷」では捉えきれていない型式変化の実態を具体的にトレースすることができた。すでに林が批

判したように（林 1991）、土器の諸属性を 1～2 種類の指標へと単純化し、それらの指標をもって土器型式の変遷過程を余すところなく説明できたとする大井の説には、遺憾ながらやや性急な部分があったといわざるを得ない。

(3) 「十和田式」の型式名称について

本論ではここまで、大井の用語との整合性をもたせるため、伊東が設定した十和田式（伊東 1942）に相当する土器群に対して、「刺突文群」という名称を用いてきた。しかしこの「刺突文群」は伊東の十和田式土器と同一の型式である一方、大井による伊東編年への批判は有効ではないとの結論に達したので、大井の型式名称を採用する理由はなくなった。よって本論で「刺突文群」としてきた土器について筆者は、以後、学史的に優先する十和田式の型式名称を用いることを宣言して擱筆としたい。

註

- 1) 北海道大学北方文化研究施設が調査を実施した香深井 A 遺跡は、現在、名称が変更され「香深井 1 遺跡」として登録されている。本論では大井論文で用いられた名称との統一性を重視し、無用な混乱を避けるため、旧名称の「香深井 A 遺跡」を用いることとする。
- 2) 最近、小野裕子は鈴木信（鈴木 1998）や筆者（熊木 2001）がおこなった後北 C₂・D 式土器の型式編年を敷衍・応用し、土器型式の地域間関係を論じている（小野 2011）。小野はこの論文の中で大井「型式論」や自らがオホーツク土器の編年に用いた方法について全く触れていないが、筆者が後北 C₂・D 式土器の編年をおこなった際に用いた方法は、属性分析の手法に基づくという点で基本的に本論と全く同じである。小野が、なぜ自らが批判する筆者の方法を用いて続縄文土器の型式編年を論じたのか、筆者には理解できない。
- 3) 実は筆者は以前、発掘報告書にてオホーツク土器の分類と編年をおこなった際に、大井による方法をそのまま採用してしまったことがある（熊木 1995、熊木 2000a）。当時から筆者は大井の方法には多少なりとも疑問を抱いていたのだが、その時は疑問を解消できるだけの能力がなかったので、香深井 A 遺跡との比較のためには方法論的な統一を図った方がよいと考えて大井の方法をそのまま採用してしまったのである。筆者が報告書で集計したデータ自体は現在でも有効であるが、編年に関する考察については一部に誤りを犯してしまっている。これは筆者の未熟さによるものであり、上記報告の内容の一部、特に香深井 A 遺跡との編年対比の部分については撤回することにしたい。
- 4) 誤解のないように言うておけば、筆者は、「A : B : C の割合が変化するというかたちでの型式学的変遷」が存在すること自体を否定するつもりはない。例えば複数の器種が認められる型式の器種組成や、隣接地域の型式群がセットとなるような組成で構成される一括土器群などの場合、このような変遷過程が認められるケースがあるであろう。ここで問題としたいのは、1 系統 1 器種の型式組列を編年のために区分する際に適切な方法は何か、ということである。
- 5) 分析対象としたのは、表土層や攪乱・排土出土土器も含めた全出土土器中、口縁部～胴部までが遺存し、報告書に復元実測図が掲載されている個体 419 点である。ただしこの中には、ミニチュア土器及びきわめて例外的な器形・文様を持つ数点の土器は含まれていない。また破片資料については、器形の判定が難しく、さらに資料の実見が困難であったため分析を省略している。
- 6) 分析対象とした 419 点の資料のうち、a/b、c/d の両方が測定できたのは 275 点である。なお刺突文系文様を持つ土器の中には、b より a が大きい深鉢形の土器がある。このタイプの土器は b の測定個所が

決められず b と d の数値が測定不能となるので、遺存率が大きいにも関わらずこの数には含めていない。

- 7) 判別分析には、エス・ピー・エス・エス株式会社の統計ソフト、SPSS 10.0J for Windows を用いた。判別分析の対象としたのは、註 6) の 275 点から無文の 35 点と貼付文の 1 点を除いた 239 点である。なお註 6) で触れた b より a が大きい深鉢形土器は、プロポーシヨンの分類としては図 8 上段のグラフに示された「領域 B」に含まれるとしてよいので、これらの土器 20 点は全てプロポーシヨン B に追加する。よって最終的に器形分類を行ったのは 259 点となる。
- 8) 完形土器の例が少ないので証明は難しいが、「直下・屈曲」と「面」に含まれる個体のプロポーシヨンは、ここに取り上げた以外の属性（器形全体の縦横比、底径／口径比、胴部屈曲部の段の有無等）で十分に判別可能と思われる。
- 9) プロポーシヨンの分類は口縁部施文位置との相関が強くなるように設定されたわけであるが、グラフや判別分析の結果が示すように両者が一対一で対応するわけではない。一対一で対応するならば分類項目を別々に設定する意味がないことはいうまでもない。
- 10) ここで注目すべきは刻文系文様内における文様要素（表 1-5 ～ 10）とその序列である。大井分類では「型押文」「刻文」が相対的にやや古く、「爪形文」がやや新しい、という集計結果がでていますが、本論のより詳細な分類では異なる序列となっている。本論の序列に明らかのように、刻文系文様内において新旧の指標となるのは、文様要素の意匠の「方向」であろう。すなわち、斜め方向の意匠（「爪 2」、「刻斜」）が古く、水平方向の意匠（「型」・「刻横」）が新しいといえる。ちなみに「爪 1」は斜めと水平の両方があるが、この違いは漸移的で分類は難しいため区別しなかった。しかし、やはり水平方向の「爪 1」の方がより新しい傾向にあるとの印象を、筆者は土器を実見した際に強く抱いている。
- 11) ただし「刺突文系パターン」52 個体のうち、「円刻」の土器はわずかに 1 個体である。
- 12) 註 7) 参照。
- 13) 「属性錯綜」とした土器を実際に見た印象で判断すると、「錯綜」というより隣接段階の「中間的」様相と解釈できる例が多い。これは、プロポーシヨン属性のみが「錯綜」となっている個体が多いのが原因であろう。プロポーシヨンの変異は特に微少で漸移的であるから、これらの個体を直ちに「錯綜」と評価できるかは難しいといえる。逆に、属性が「錯綜」としていると見ただけで判断できる土器は、刺突文群と刻文Ⅱ群との「錯綜」例があるもののごく少数であり、刺突文群と沈線文群との「錯綜」例は全く確認できない。また刻文Ⅰ群と沈線文群の「錯綜」例は、異なる段階の共存ではなく、サハリンの型式の影響と考えた方がよい。以前、別の論文で述べたように（熊木 2005, 2007）、サハリン以北では刻文Ⅰ群段階の土器に沈線文が併存する例が普通に見られる。
要するに、分類上は「属性錯綜」とした土器も、その実態を評価してみると、実際には離れた段階の属性が共存すると認定できる個体は少ない、ということである。
- 14) 改めていうまでもないかもしれないが、刻文Ⅱ群と沈線文群との間は表 5 に記した属性の差（口縁部文様要素、肥厚帯の消滅）以外にも、例えば器形上の細かい差（胴部屈曲部の段、口唇部の形）なども存在する。このような差を考慮したばあい、両群の間の「類似度」はさらに低下することとなる。実際、刻文Ⅱ群と沈線文群の関係は、それほど近いものとしては意識されていないというのが多くの研究者の実感ではないだろうか。もっとも、我々の価値判断には「文様要素の重視」という学史的なバイアスがかかっている可能性もあり、その点には注意を要する。
- 15) 刺突文群と沈線文群の間には共通するように見える属性もある（口縁部肥厚帯を持たない、器形が甕形）が、これらが両者の併存や影響関係を示すものではないことは自明であろう。
- 16) 天野・小野の両氏は、刺突文群土器の変遷について、古い段階の胴部文様要素には刻文と隆帯文が多く、新しい段階になると沈線文と無文が増加する傾向にあるとまとめている（天野・小野 2002）。隆帯文が減少する傾向は両氏の指摘通りであろう。しかし本文に述べたように、替わって増加するのは沈線文というより、正確には沈線＋刻文の意匠であろう。一方、無文の増加と刻文の減少についてはそれほど顕著な傾向ではないと筆者は評価するが、筆者が鈴谷式土器編年（熊木 2004）で着目した「縦方向に揃

えられた刻文」＝短刻線（菊池 1971）文が、十和田式では I0 突瘤文土器の方に比較的多く認められる点には注目しておきたい。

- 17) ただし香深井 A 遺跡の魚骨層 VI およびその下層から出土した土器は、刺突文群の前半段階である可能性が高い。
- 18) 小野裕子氏は、元地遺跡の魚骨層 I ～ I” と香深井 A 遺跡の「狭義の黒褐色砂質土層」の文様要素出現率を比較し、前者が相対的に新しいことを指摘している（小野 1998a）。しかし土器図版が示されていないので元地遺跡例の具体的な内容については不明な部分が多く、型式学的な見地からの検証は難しい。
- 19) 無論、本文中の b) c) のみをもって、これらの沈線文系土器群が筆者の貼付文期前半段階より古いことが証明できるわけではなく、両者が併行する可能性も考慮する必要がある。しかし常呂町以東の遺跡で見る限り、貼付文期前半段階そのもののまともには沈線文系の文様要素はごく一部の例外を除き認められない。目梨泊遺跡でも同様に、貼付文期前半段階には沈線文系の要素はほぼ消滅しているとみられる。
- 20) 道東部で筆者が「沈線文期前半段階」に位置づけた土器群には、粒状の貼付文を有する例がある（熊木 2010a：図 1-7）。この点については評価が難しく、今のところ筆者は、この種の文様が道東部で早く出現することを示すものとしてとらえているが、筆者の道北部と道東部の編年対比に誤りがある可能性もある。これについては今後の課題としたい。
- 21) 層位的出土状況の検討対象には道北部以外、特に道東部の遺跡も含めている。道北部と道東部では刻文 II 群の段階から地域差が目立ち始めるが、道北部の刻文 II 群と、併行する道東部の型式（筆者の刻文期後半段階〔熊木 2009, 2010a〕）との編年対比は容易であるので、両型式は併行関係として把握できる。よって道東部の出土状況から道北部の時期と型式を推定しても大きな問題は生じないであろう。
- 22) この「オホーツク土器前期はじめ」とは右代啓視氏による編年（右代 1991）の I -a 期、すなわち刺突文群土器に相当するとみられる。
- 23) 近隣と思われる「辻中氏宅」「村椿氏宅」の資料（大沼・本田 1970）を含めた場合には刺突文群が追加される。その場合、本遺跡は「刻文 II 群の後、継続性が絶たれる遺跡」にのみ分類されることになるだろう。
- 24) 魚骨ブロック 5 からは「円形刺突文」を有する土器が 2 点出土している。報告者の佐藤昌俊と藤沢隆史は、これらの土器を「Ⅲ群 C 類」（筆者分類の刻文 II 群・沈線文群に相当）に含めて分類しており、筆者も両氏に賛同する。その根拠は両氏の見解と同様に、これらの土器の器形が沈線文群と選ぶところがない点、さらに「円形刺突文」自体の特徴も刺突文群本来の特徴とは大きく異なっている点にある。これらの土器は「属性錯綜」ではなく、沈線文群の特異な例としてとらえるべきであろう。
- 25) ただし刺突文群と刻文 I 群は、時間的にも型式的にも全く非連続なわけではない。本文で「円刻」としたような、刺突文系文様と刻文系文様が同一個体中に共存する例は、そのことを明瞭に示している。ただしこのような土器は香深井 A 遺跡例を中心に、わずかな例が各地で散見されているに過ぎない。ここでは、刺突文群と刻文 I 群の間に、多少の「漸移的」な部分があることを認めた上で、出土パターン 1・2 の遺跡が道北部でも確認されていることの方を重視し、両型式の間を基本的に非連続な時期差としてとらえておきたい。
- 26) オンコロマナイ遺跡 H-1・H-2 堅穴上層出土土器群（泉・曾野編 1967）は、沈線文群単独の出土例となる可能性もあるが、報告された個体数が少なく確言できない。なお浜中 2 遺跡 1990 年度調査 B 区では、近世アイヌの遺物、「元地式」、沈線文系土器、刻文系土器、刺突文群がそれぞれ層位的なまとまりをもって出土したとされている（前田・山浦編 1992）。調査者によれば層位毎に排他的に型式が包含される状況はかなり明瞭で、型式の層位的変化をみた場合には「漸移的な量的変化を示すことがなかったことを特徴として指摘できる」（前掲書：43）というほどであったという。報告者による引用部分の記述はおそらく大井「型式論」に対する反証を意識したものであろう。ただし各層から出土した遺物の全容についての詳細データがなく、各層の具体的な型式内容について不明な部分が多いため、本例は本文ではデータとして採用しないでおく。

27) 両者の差は、最大で 3.12 倍（魚骨層Ⅱ）、最小で 2.57 倍（魚骨層Ⅴ）である。

引用文献

- 網走市立郷土博物館編 1986『網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録第1集』網走市立郷土博物館
- 天野哲也 1981「土器・土製品について」『香深井遺跡 下』東京大学出版会, 308-328
- 天野哲也 1998「オホーツク文化の形成と鈴谷式の関係: 礼文島香深井遺跡群を中心に」『北方の考古学: 野村崇先生還暦記念論集』, 367-381
- 天野哲也・小野裕子 2002「オホーツク文化の形成過程: 「十和田式」をさかのぼる」『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』北海道大学総合博物館, 115-118
- 荒川暢雄・種市幸生・内山真澄 1997『香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 泉靖一・曾野寿彦編 1967『オンコロマナイ』東京大学出版会
- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』東京大東書館, 3-28
- 伊東信雄 1982「樺太の土器文化」加藤晋平・澤四郎編『縄文土器大成5: 続縄文』講談社, 150-153
- 右代啓視 1991「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』19: 23-49
- 右代啓視・小林幸雄・山田悟郎ほか 1998「枝幸町ウバトマナイチャシ第1次発掘調査概報」『北の文化交流史研究事業』中間報告, 69-88
- 大井晴男 1972「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について: 擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論2」『北方文化研究』6: 1-36
- 大井晴男 1982「土器群の型式論的変遷について(上)(下): 型式論再考」『考古学雑誌』(67)3: 22-46・(67)4: 28-47
- 大川 清 1998『北海二島: 禮文・利尻島の考古資料』窯業史博物館
- 大塚達朗 2000『縄紋土器研究の新展開』同成社
- 大沼忠春・本田克代 1970「羅臼町出土のオホーツク式土器について」『北海道考古学』6: 27-38
- 大場利夫 1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』11: 187-256
- 大場利夫・大井晴男編 1976『香深井遺跡 上』東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1981『香深井遺跡 下』東京大学出版会
- 大場利夫・新岡武彦・大井晴男ほか 1972『枝幸町川尻チャシ調査概報』枝幸町教育委員会
- 岡田淳子・梶田光明・西谷栄治ほか 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 小野裕子 1998a「礼文島オホーツク文化「地域集団」の最終末期に関して: 遺跡間の関係を中心に」『時の絆: 道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会, 363-387
- 小野裕子 1998b「礼文島オホーツク文化の「地域集団」における浜中2遺跡の位置(上)(下)」『古代学研究』142: 1-21・143: 20-29
- 小野裕子 2011「続縄文後半期の道央地域の位置について」小口雅史編『海峡と古代蝦夷』高志書院, 77-128
- 小野裕子・天野哲也 2008「オホーツク文化の形成と展開に関わる集団の文化的系統について」榎森進・小口雅史・澤登寛聡編『アイヌ文化の成立と変容-交易と交流を中心として(上): エミシ・エゾ・アイヌ』岩田書院, 139-192
- 菊池俊彦 1971「樺太のオホーツク文化について」『北方文化研究』5: 31-53
- 北構保男 1992「標津町三本木オホーツク遺跡試掘調査概報」『しべつの自然 歴史 文化』1: 13-20
- 北構保男・須見洋 1953「北海道根室半島トーサムポロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』24: 31-48
- 北構保男・前田潮・山浦清ほか 1984「北海道根室市トーサムポロ遺跡オホーツク文化住居址」『日本考古学年報』34: 227-229
- 工藤研治 1992「三本木遺跡の範囲確認調査(試掘)について」『しべつの自然 歴史 文化』1: 21-30

- 熊木俊朗 1995「土器」内山真澄編『遺跡発掘調査報告書：利尻富士町役場』利尻富士町教育委員会，17-56
- 熊木俊朗 2000a「香深井 5 遺跡の変遷と居住パターンに関する問題」内山真澄編『香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2)』礼文町教育委員会，151-158
- 熊木俊朗 2000b「香深井 5 遺跡出土『元地式』土器について」『香深井 5 遺跡発掘調査報告書 (2)』礼文町教育委員会，159-167
- 熊木俊朗 2001「後北 C₂・D 式土器の展開と地域差」宇田川洋・熊木俊朗編『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科，176-217
- 熊木俊朗 2004「鈴谷式土器編年再論」『アイヌ文化の成立：宇田川洋先生華甲記念論文集』北海道出版企画センター，167-189
- 熊木俊朗 2005「江の浦式土器編年の再検討」熊木俊朗・福田正宏編『間宮海峡先史文化の復元と日本列島への文化的影響』東京大学常呂実習施設・ハバロフスク州郷土誌博物館，185-211
- 熊木俊朗 2007「サハリン出土オホーツク土器の編年」前川要編『北東アジア交流史研究』塙書房，173-199
- 熊木俊朗 2009「オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」米村衛編『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会，303-319
- 熊木俊朗 2010a「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察」菊池徹夫編『比較考古学の新天地』同成社，709-729
- 熊木俊朗 2010b「元地式土器に見る文化の接触・融合」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会，297-313
- 駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部
- 榊田朋広・熊木俊朗・福田正宏 2007「旭川市博物館所蔵サハリン州スタロドフスコエ遺跡出土土器について」熊木俊朗・福田正宏編『極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究』東京大学常呂実習施設，13-38
- 佐藤隆広編 1985『ホロベツ砂丘遺跡』枝幸町教育委員会
- 佐藤隆広編 1994『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 澤四郎ほか 1971『羅臼』羅臼町教育委員会
- 市立函館博物館編 1983『児玉コレクション目録：I 先史・考古資料編』市立函館博物館
- 鈴木 信 1998「I 黒層の土器について」三浦正人・鈴木信編『千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (1)』北海道埋蔵文化財センター，329-286
- 林謙作 1990「縄紋時代史 6：縄文土器の型式 (1)」『季刊考古学』32:85-92
- 林謙作 1991「縄紋時代史 8：縄文土器の型式 (3)」『季刊考古学』34:91-99
- 本田克代・豊原照司・涌坂周一 1980『船見町高台遺跡』羅臼町教育委員会
- 前田潮・藤沢隆史編 2001『香深井 6 遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 前田潮・山浦清編 1992『浜中 2 遺跡の発掘調査』礼文町教育委員会
- 柳澤清一 2001「礼文・利尻島から知床・根室半島へ：道北・道東「オホーツク式」・トビニタイ・擦紋土器編年の対比」『先史考古学研究』8:65-105
- 柳澤清一 2008『北方考古学の新天地』六一書房
- 山内清男 1932「日本遠古之文化 I 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』(1)4 (新刷 1967:1-4)
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』(1)1 (新刷 1967:45-48)
- 山内清男 1964「縄紋式土器・総論」『日本原始美術 I』講談社，148-158
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館・野村書店
- 米村衛編 2009『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会
- 涌坂周一編 1996『相泊遺跡 (2)』羅臼町教育委員会

Typological and Chronological Reexamination of the Types of Okhotsk Pottery from Kabukai-A Site

KUMAKI Toshiaki

The purpose of this paper is to reexamine typology and chronology of the types of Okhotsk pottery from Kabukai-A site in Rebun Island, in the northern part of Japan. A group of the pottery of Kabukai-A site is the most important material for the chronological study of the types of Okhotsk pottery in the northern part of Hokkaido. Based on the results of investigation of this site, Haruo OI propounded the transition model of the pottery types and consequently denied the method of chronology of pottery types developed by Sugao YAMANOUCHI. In this paper, in order to argue against OI's transition model, I analyze the group of the pottery of this site using techniques of attribute analysis. As a result, unlike OI's transition model, typological changes of the group are found to exhibit a unilinear and irreversible way. Based on the results I divide the group of the types of Okhotsk pottery in the northern part of Hokkaido into the following 5 types (8 stages), the groups of the puncture marks = Towada types (early / late stage), the group of the impressed patterns I, the group of the impressed patterns II, the groups of the incised lines (early / late stage) and the groups parallel with the groups of applique decoration in the eastern part of Hokkaido (early / late stage).